

学内広報

for communication across the UT



特集：マリオ・バルガス=リョサ氏に名誉博士称号を授与

2011.7.25

No. 1414

6月22日（水）15時50分から法文2号館2階1番及び2番大教室において、マリオ・バルガス＝リヨサ氏に対する本学名誉博士称号の授与式が開催されました。本学の名誉博士号授与は、イリノイ大学アーバナ・シャンペン校レグット教授に続き6人目となります。バルガス＝リヨサ氏は、「権力構造の見取り図を描き、個人の抵抗、反乱、敗北の姿を鋭く表現」した功

績により2010年ノーベル文学賞を受賞しております。授与式では、佐藤慎一理事・副学長（総長の代理）による名誉博士記及び記念品の授与が行われ、引き続き、バルガス＝リヨサ名誉博士からスピーチが述べられました。授与式に先立ち「文学への情熱ともうひとつの現実の創造」と題した講演会が行われ、多くの参加者が熱心に聴講し、盛況のうちに終了しました。

総長祝辞

マリオ・バルガス＝リヨサ殿

本日、あなたを東京大学本郷キャンパスにお迎えし、東京大学名誉博士称号を授与することを、たいへんうれしく思います。東京大学が名誉博士称号を授与するのは、あなたが6人目であり、作家・文学者に授与するのはあなたが最初です。

東京大学最高の栄誉をあなたに授与するのは、あなたが作家として多くのすばらしい作品を発表されたことに加え、普遍性と批判精神に富むあなたの創作の精神が、東京大学を支える価値観と、深い部分で合致しているからです。あなたは20歳代前半から創作活動を開始され、南米社会の過去と現在が深く刻印された素材を扱いつつ、文化や言語の地域的特殊性を越えて世界中の人々に訴えかける力をもつ、スケールの大きな物語を多数発表してこられました。あなたの作品の大部分は日本語に翻訳されており、私も含め、あなたの作品を読んだ日本人読者は、あなたが現代の世界文学を牽引する偉大な作家であり、私たちの心に呼びかける力を持つ傑出した文学者であることを知っています。

あなたはまた、文学の営みを解明しようとする学究肌の文学者であり、創作のメカニズムおよび文学の浸透力と継承性について、若い人々に向かって平明に語ることに努められてきた教育者でもあります。世界の数多くの大学で講義されたあなたの経歴が、そのことを雄弁に物語っています。本日の講演であなたが文学について語った言葉は、聴衆の心に深く刻印され、末永く記憶されることでしょう。あなたの言葉に感動した若者たちの中から、次の時代の日本のラテンアメリカ文学研究を担う研究者が出現することを、私は確信しています。

現代は、科学や技術が驚くべき勢いで発展を遂げつつある時代です。科学や技術の発展が人類に大きな恩恵をもたらしたことは疑いのない事実であり、世界の多くの大学は、この領域でより先端的な業績をあげようと、激しく競争しています。しかしながら、科学や技術の領域で優れた成果を挙げることは、大学が果たすべき役割のすべてではありません。いかなる社会においても、人間をその根源において捉えようとする文学的・人文学的な識見や感性は、私たちが人間として

生きるうえで不可欠なものであり、東京大学は、そのような文学や人文学の領域において根源的な洞察を社会に提示することを、科学や技術の推進とともに、自らの重要な役割であると考えています。東京大学が、人間精神の洞察において最も卓越した作家・文学者であるあなたに名誉博士の称号を授与することには、東京大学のこうした認識が込められているのです。

あなたの経歴書を拝見すると、あなたは既に世界中の20近い著名な大学から、名誉博士学位の称号を授与されていますが、アジアの大学から授与されるのは、今回がはじめてのことです。東京大学は、あなたに名誉博士学位を授与する、アジアで最初の大学となったことを誇りに思います。

そして、本日の名誉博士称号の授与が、長く続くであろうあなたのこれからの創作活動への力づけになることを、あなたの小説の読者のひとりとして、私は心から願っています。

2011年6月22日

東京大学総長 濱田純一



マリオ・バルガス＝リヨサ氏 謝辞

東京大学総長、文学部長、各国大使の皆様、教授の皆様、ご来賓の皆様、友人の皆様。東京大学より、まことに寛大にもこの名誉博士号を授与していただき、象徴的にはありますが日本の最も権威ある学府の教授陣に加えていただいたことを、深く感謝しております。きわめてまれにしか与えられることのない、私には過ぎたる榮譽を東京大学が与えてくださった影には、実に大きな寛大さが存在することを、私ははっきりと認識しております。そしてまた、この名誉博士号には、評価や榮譽ばかりでなく、責任が伴うということも深く認識しております。それは自分が知的ならびに芸術の仕事において、厳しくかつ真正であらねばならない、また道徳的に公正であらねばならない、と命じられたことを意味しています。

自分の天職が作家であると気づいてからというもの、私は毎年執筆を続けて参りましたが、その間、私的には多くの満足、喜び、高揚をもたらしてくれたこの天職が、まさかこのような評価を与えてくれるとは、正直なところ考えてもみませんでした。書くというのは孤独な仕事で、一日のうちの多くの時間、一週間のうちの多くの日々、一年のうちの多くの月の間、作家を周囲から隔ててしまいます。その孤独な作業において作家は、記憶を出発点とし、想像力を大きく働かせて、ひとつの世界を繰り返し創造し、自分の欲望、夢、切なる望みに応じて変化させ、加工していきます。そしてすべての作家は、自らの時間と精力を傾けて物語を創りながら、この物語が本になって読者に届いたらどんなことが起きるだろう、と思いをめぐらすのです。

作家にとり、自分が書いたものがその場限りのものでも、大して意味のない、長もちしない試作品でもなかったことの証となるのが、たとえばこのような評価です。それは次のことを知る手がかりになります。書いたことが無駄にはならなかったこと、読者に届き、彼らの心を動かすことができ、ことによると、彼らが人生において直面しなければならぬ逆境と向き合うときに助けになったかもしれないこと。私の本が言葉の障壁を打ち破り、他の言語の読者に届くことになろうとは思ってもみませんでしたし、もちろん、地理的にこれほど遠い、文化的には必ずしもそうではありませんが、日本に届きうるとは想像できませんでした。ですから私は、皆様が今お聞きになったばかりの、この名誉博士号を私に授けてくださる理由を述べた総長の実に寛大なお言葉に、大きな感動を覚えました。

きっと日本の多くの方がご存知でしょうが、日本は私の生まれた国から遠くはありません。ペルーは日本人移民に門戸を開いた、アメリカ大陸で二番目の国です。そして19世紀の終わりから、ペルーに住む日本人は現代ペルーの形成に実に大きく貢献してきました。最初はとりわけ農村地帯においてです。リマの北部ではそれら初期の日本人移民の献身的努力のおかげで近代的な農業が生まれました。しかし、現代のペルーに対する

日本の貢献は多方面にわたっています。経済、ビジネス、政治、そして特に芸術の分野で、日本は足跡を残し、ペルーという国の文化的モザイクを形作るのに寄与しています。絵画、詩、音楽の分野をはじめ、料理など他の創造的活動においても、日本はペルーという国の多様性の一部を形作っているのです。

私はすでに日本を四回訪れていますが、最初のときからこの国の特異性に変な強い印象を受けてきました。日本は近代的な国であり、もちろん世界に組み込まれていますが、しかし同時に、伝統文化に忠実であり続けてきた国でもあります。この伝統文化は見事に守られ、初めてこの国を訪れることになった外国人にとって、印象深く感動的であるばかりか、健全な嫉妬すら覚えさせる特質を、現代の日本に与え続けてきました。また日本に決して失なあってほしくないそれらの特質のひとつに、形式に対する配慮があると言えるでしょう。私たち作家や芸術家は一般に形式に対してきわめて敏感です。なぜなら芸術や文学は、すべて形式に依存しているからです。作品は形式次第で、深くもなれば薄っぺらにもなる。独創的にもあるいは型どおりにもなりえますし、感動的な凹凸もできれば、表面的で平板にもなります。私はずいぶん世界を旅してきましたが、日本ほど形式が人々の生活を形作っている国を知りません。そのために、日本を訪れる外国人はこの国、特にこの東京という都市における人々の生活に見られる気品と美しさに驚かされるのでしょうか。三十年余りの間に行った四度の日本訪問で、私は様々な変化、並外れた変化、大規模な近代化を目撃してきました。一方で、日本人の生活において変わらないものとして、良き趣味、上品さ、人々や組織の関係に見られるある種の礼儀作法の尊重も絶えず目にしてきました。それゆえ、日本の芸術そして文学は大変素晴らしい個性を備えているのだと思います。

私を何らかの形で日本に結び付けてくれる大学の学位をいただいたことで、私は大変得意な気持ちであり、大いに感動しています。自分の感情をまったく客観的に言い表すために、言葉はときとして私たち作家にとっても足りないことがあるのを私は知っています。そして今がその場合なのです。このような場で述べることは、しばしば月並みな形になりがちです。けれども、私が皆様に申し上げていることには、本日受けた賞賛に対する真の感謝の気持ちがこもっています。

最後に、この学位、そして今身につけている帽子やガウンが肩に負わせる責任を、私は大いに自覚しています。そしてもちろん、残された年月、仕事を進める際に、この名誉博士号に伴うまことに寛大な言葉の高みに届くよう、努力を怠らないつもりです。そして当然ながら、市民および公民としての行動において、皆様を裏切ることのないように、果たすべきことはすべて果たすつもりです。以上のことを、東京大学総長をはじめ教授の皆様には確言して、感謝の言葉を終えたいと思います。

ありがとうございました。

(野谷文昭訳)

総長祝辞（スペイン語）

Mi nombre es Shinichi Sato y soy el vicerrector de la Universidad de Tokio. El Dr. Hamada, rector de nuestra Universidad, se encuentra presidiendo la Asamblea de la Asociación de Universidades Nacionales y de ahí que no pueda estar en esta ceremonia y me haya encomendado leer el saludo que ha escrito para la ocasión.

Distinguido Mario Vargas Llosa:

Nos satisface enormemente recibirlo en este campus de Hongo para conferirle el título de Doctor Honoris Causa, que la Universidad de Tokio otorga por sexta ocasión y nunca antes había recibido un hombre de letras.

Al otorgarle la más alta de sus distinciones, la Universidad de Tokio reconoce no solo la excelencia de su vasta obra literaria sino además la coincidencia profunda, en ella, de dos valores esenciales para nuestra institución: la universalidad y el espíritu crítico. Usted se inició en la actividad creadora cuando apenas tenía veinte años, ocupándose de asuntos que marcan y vinculan el pasado y el presente de la sociedad sudamericana, y desde entonces no ha dejado de publicar obras capaces de llegar a la gente de todo el mundo, por encima de las idiosincrasias culturales y lingüísticas locales. La mayor parte de su obra está traducida a nuestra lengua y sus lectores japoneses, entre los que me incluyo, sabemos que usted es un escritor que impulsa la literatura del mundo contemporáneo y que se ha destacado por ser capaz de apelar a nuestro corazón.

Usted es un literato pero asimismo un estudioso empeñado en dilucidar la obra literaria y, al mismo tiempo, un educador que ha querido hablar en términos asequibles a los jóvenes acerca de los mecanismos de la creación y la capacidad de penetración y pervivencia de la literatura. Su experiencia de profesor, que ha dictado cátedra en numerosas universidades del mundo, nos lo muestra elocuentemente. Sus palabras sobre la literatura en la conferencia de hoy, acuñadas en la mente del público, se recordarán siempre. Estoy seguro de que entre los jóvenes que hoy han sido conmovidos por sus

palabras están los estudiosos japoneses de la literatura latinoamericana de una época por venir.

En la era contemporánea, la ciencia y la tecnología se han desarrollado con una velocidad sorprendente. Es indudable que su avance ha brindado grandes beneficios a la humanidad. Muchas universidades en el mundo compiten intensamente para lograr los trabajos más avanzados en estas áreas. Pero esto no es todo lo que una universidad debe alcanzar. En cualquier sociedad, el conocimiento y la sensibilidad literaria y artística son imprescindibles para una vida plenamente humana. La Universidad de Tokio piensa que le corresponde desempeñar ese importante papel al desarrollar investigaciones sobre lo esencial en el ámbito de la literatura y las humanidades junto con la promoción de la ciencia y la tecnología. Es este reconocimiento el que sostiene la entrega del título de Doctor Honoris Causa a usted, que es el escritor y literato más prominente en el discernimiento del espíritu humano.

Su curriculum vitae registra ya casi veinte universidades del mundo de las que ha recibido el título de Doctor Honoris Causa, pero no hay entre ellas ninguna universidad asiática. La Universidad de Tokio se enorgullece en ser la primera universidad en Asia que le otorga el título de Doctor Honoris Causa.

Como uno de sus lectores, deseo fervientemente que el título de Doctor Honoris Causa que ahora le otorgamos anime su actividad creadora en los años por venir.

a 22 de junio de 2011

Junichi Hamada
Rector
Universidad de Tokio

Palabras de Vargas Llosa

Señor Rector de la Universidad de Tokio, señor decano de la Facultad de Letras de la Universidad de Tokio, señores embajadores, catedráticos, señoras, señores, queridos amigos. Agradezco profundamente este título de doctor honoris causa que tan generosamente me concede la Universidad de Tokio, asociándome de manera simbólica al claustro de la institución académica más prestigiosa del Japón. Soy muy consciente de la enorme generosidad que hay detrás de esta inmerecida distinción que la Universidad de Tokio otorga con tanta rareza, y soy muy consciente también de que además de un reconocimiento y una distinción este título conlleva una responsabilidad y es un mandato de rigor y autenticidad y de limpieza moral en mi trabajo intelectual y artístico.

La verdad es que nunca en mi vida cuando descubrí que tenía la vocación de la literatura, y en todos los años que llevo escribiendo pensé que esta vocación que me ha deparado en lo privado tantas satisfacciones, tantas ilusiones y tantos entusiasmos, me depararía también reconocimientos como este. Escribir es una tarea solitaria, que lleva a un escritor a aislarse muchas horas en el día, muchos días en la semana y muchos meses en el año, en una tarea solitaria en la que utilizando la memoria como punto de partida con un gran esfuerzo de imaginación, uno va recreando un mundo, reconvirtiéndolo, transformándolo, en función de sus deseos, de sus sueños, de sus anhelos, y creo que todos los escritores mientras dedican su tiempo y su energía a crear historias se preguntan qué ocurrirá una vez que estas historias convertidas en libros lleguen a los lectores.

Uno de los indicios que tiene un escritor de que lo que ha escrito no ha sido perecedero, un ejercicio sin mayor significación ni duración, son reconocimientos como este. Es una manera de saber que lo que uno ha hecho escribiendo no ha sido inútil, ha llegado a algunos lectores y ha sido capaz de conmoverlos y ojalá ayudarles a enfrentar mejor equipados las adversidades que toda vida humana debe enfrentar. Nunca hubiera imaginado que mis libros romperían las barreras del idioma y llegarían a lectores de otras lenguas y desde luego nunca hubiera imaginado que podían llegar tan lejos en el espacio geográfico, ya que no en el cultural, al Japón. Estoy por eso muy conmovido con las palabras tan generosas que el Rector de la Universidad acaban ustedes de escuchar explicando las razones por la que se me ha concedido este doctorado honoris causa.

El Japón no está lejos del país en el que yo nací, como seguramente saben muchos japoneses, el Perú fue el segundo lugar en América que abrió sus puertas a la inmigración japonesa, y los japoneses que están en el Perú desde fines del siglo 19 han contribuido de manera enormemente creativa a la formación del Perú moderno. Al principio sobre todo en el mundo rural donde en el norte de Lima surgió un agricultura moderna gracias al esfuerzo, al empeño, a la dedicación de esos primeros inmigrantes japoneses, pero la contribución de Japón a la realidad peruana de nuestros tiempos es múltiple. Tanto en el campo

de la economía, en el campo de la vida comercial e institucional, y sobre todo en el campo artístico, Japón ha dejado una huella y ha contribuido a modelar ese mosaico de culturas que es el Perú. En el campo de la pintura, en el campo de la poesía, en el campo de la música, no se diga en otras actividades creativas, entre ellas la cocina, el Japón forma parte de esa gran diversidad que es el Perú.

Yo he venido cuatro veces ya a este país y desde la primera vez me ha impresionado enormemente la singularidad de Japón. Es un país moderno, integrado al mundo desde luego, pero al mismo tiempo es un país que ha sabido ser fiel a su cultura tradicional, que está maravillosamente preservada y que ha dado al Japón moderno características que a los forasteros que llegamos por primera vez a visitarlo nos impresionan, nos conmueven y nos llenan de una sana envidia, y yo diría que entre esas características, que ojalá Japón no pierda nunca, está el cuidado de las formas. Los escritores, los artistas en general somos muy sensibles a las formas porque en el arte y en la literatura todo depende de la forma. Gracias a la forma una obra puede ser profunda o superficial. Puede ser original o rutinaria, tener un gran relieve dramático o ser plana y superficial. Y yo, que he viajado mucho, no he conocido nunca un país en el que las formas modelen tanto las vidas de las personas como en Japón. Por eso creo que a los forasteros que visitan Japón les sorprende la elegancia y la belleza de la que está hecha la vida en este país, y muy particularmente en esta ciudad, que es Tokio.

En estas cuatro visitas que yo he hecho a Japón a lo largo de más de treinta años, he visto cambios, transformaciones extraordinarias, una gran modernización pero siempre he visto como algo permanente de la vida japonesa el buen gusto, la elegancia, el respeto de cierto protocolo en las relaciones de las personas y las instituciones y por eso creo que el arte y la literatura japonesas tienen esa extraordinaria personalidad que el mundo entero admira y respeta. Tener un título universitario que de alguna manera me vincula a Japón por eso me enorgullece y me conmueve enormemente. Sé que a veces las palabras también a los escritores nos faltan para expresar con absoluta objetividad nuestros sentimientos y éste es uno de estos casos, lo que se dice en estas ocasiones adopta muchas veces la forma de un lugar común, pero les aseguro que aquello que estoy diciéndoles es algo que viene acompañado de un sentimiento auténtico de gratitud ante el homenaje que hoy día recibo.

Quiero terminar asegurándoles a los señores dirigentes y profesores de la Universidad de Tokio que soy muy consciente de la responsabilidad que están poniendo sobre mis hombros con este título y con estas insignias que ahora llevo puestas y que desde luego puedo asegurarles que en los años que me quedan y en los trabajos que lleve a cabo, no ahorraré esfuerzos para estar a la altura de las palabras tan generosas que han acompañado este doctorado y que desde luego también en mi conducta cívica y ciudadana haré todo lo que haga falta para no defraudarlos.

Muchas gracias.

功 績 書

ラテンアメリカでは1960年代に文学が活況を呈し、そこから生まれる実験的で物語性豊かな新小説が世界的〈ブーム〉となり、1970年代末には日本にも波及した。こうした〈ブーム〉の背景には、貧困や暴力、社会的不正に満ち、識字率も高いとは言えない国々を含む地域に生まれる文学が、かえって既成の価値観やモラルに囚われず、人間の真実をストレートに炙り出す力をもつという逆説が働いている。

バルガス=リヨサ氏（1936年生まれ）は、コロンビアの作家ガルシア=マルケスらと並んで、このラテンアメリカ文学を代表する作家であり、自国ペルーおよびラテンアメリカの現実を批判的に描く力強い作品によって早くから脚光を浴び、行き詰まったと言われていた小説の可能性を世界に再認識させた。

ラテンアメリカ文学の担い手の多くは、かつてヨーロッパからアメリカ大陸に渡ったスペイン人やポルトガル人の末裔であるが、彼らは、先祖が征服者である一方で宗主国と戦い独立を達成したこと、征服・被征服、独立といった歴史が今日に及ぶ複雑な社会状況をもたらしたことにきわめて意識的である。バルガス=リヨサ氏の文学を特徴づける批判精神と世界市民的倫理観は、このような歴史意識に根ざすものである。

氏の著作は早くから日本に紹介され、初期の『ラ・カテドラルでの対話』、『緑の家』から近年の『楽園への道』、『チボの狂宴』にいたる代表的な小説作品が日本語で読める。ガルシア=マルケス論やフロベール論などの評論は、氏が研究者としても並々ならぬ才能の持ち主であることを証している。セルバンテス、ディケンズ、バルザック、トルストイ、コンラッド、トーマス・マン、フォークナー、サルトル、カミュら、世界の先達から豊かで多様な滋養を受け取った氏は、想像力に働きかけて時空を超えた世界へと読者を導く文学という営みの波及力と継承性について、深い認識を培っている。氏は1976年から79年まで国際ペンクラブ会長を務め、世界の文学者の連帯に貢献した。また、大江健三郎氏との往復書簡に示されているように、氏は、暴力や不寛容と戦う知識人でもある。

氏は欧米の大学で教壇に立つ機会が多く、講義や講演から生まれた著書も少なくない。書評やエッセイにおいても、日本を含む世界の文学に目を配り、進んで若い読者に語りかける姿勢を示している。このようにバルガス=リヨサ氏には優れた研究者並びに教育者という側面があり、その意味では大学に極めて親しい作家と言える。世界の数多くの名門校から名誉博士号を授与されているのはその証である。

氏の文学は、ラテンアメリカ特有の土俗性と混沌を、虚構を通じて知的に捉えなおすことにより、稀有な普遍性と奥深さに到達している。そして、まさにその普遍性と奥深さゆえに、氏の作品は多数の外国語に翻訳されて世界中に読者を獲得し、言語によって仕切られた国民文学の枠を超越して、現代の世界文学を牽引している。国民文学研究の長い歴史を持つ東京大学文学部にあって、2007年度に新たに開設された「現代文芸論」が教育研究の対象とするのは、バルガス=リヨサ氏のような現代の世界文学を牽引する作家とその作品に他ならない。

バルガス=リヨサ氏にとって文学とは、批判精神を基盤として、虚構世界を提示することで現実の矛盾や欠陥を痛感させ、幻滅から美しい世界への憧れを醸成する営みである。また、驚きや共感や怒りといった具体的な心の動きを通して、言語、習俗、偏見を超えたところで人々を結び合わせる場であると同時に、異質なものと接触を介して自己や自文化を再発見する貴重な機会でもある。氏はノーベル文学賞受賞記念講演において、「虚構とは、文明が存在し、自らを更新し、人間の最良の成果を後世に残して行くために不可欠な条件である」と語っている。このような氏の文学的営みは、国籍、民族、言語等のあらゆる境を超えて人類普遍の真実を追究し、文化の批判的継承と創造に寄与することを教育と研究の基底に据える東京大学の精神と深く共鳴し、これを力づけるものである。

以上のような功績を慎重に審査した結果、バルガス=リヨサ氏は、本学名誉博士称号授与規則が掲げる「学術文化の発展に特に顕著な貢献があり、本学において顕彰することが適当と認められる者」に相応しいと判断される。よってここに東京大学総長は、東京大学教育研究評議会の議を経て、バルガス=リヨサ氏に対して、東京大学名誉博士の称号を授与するものである。

Logros

En América Latina durante la década de los 60s del siglo XX, la literatura fue cobrando una muy vigorosa actividad que desembocó en el llamado *boom* de la literatura latinoamericana, que propuso una nueva novela experimental llena de posibilidades narrativas. Este mismo movimiento se dio a conocer de manera amplia en Japón a partir de finales de los 70s. Nació esta literatura en sociedades con graves problemas de pobreza, violencia, injusticia y analfabetismo, lo cual parecería una paradoja. Sin embargo, quizás sea esta misma circunstancia la que obligó a los escritores de esta generación a expresar con tanta originalidad la verdad del ser humano sin atarse a los valores por entonces imperantes.

Mario Vargas Llosa (nacido en 1936) es, junto al colombiano García Márquez, el escritor más representativo de esta literatura latinoamericana. Despuntó desde muy temprano dado que logró a través de sus obras criticar a la realidad de su país y de América Latina, y darle a conocer al mundo que la novela, género por entonces considerado como ya consumido y en un callejón sin salida, todavía tenía posibilidades.

Los primeros escritores latinoamericanos fueron, en su gran mayoría, descendientes de los colonizadores españoles y portugueses y nunca perdieron de vista que sus ancestros pelearon y ganaron su independencia frente a un país fanático, no olvidaron su propio ciclo de ser colonizadores, colonizados, independientes, y de como estos procesos le dan forma de maneras complejas a la sociedad de hoy. Vargas Llosa nunca pierde de vista este hecho histórico aunque obliga a su espíritu crítico a regirse siempre por una lógica universal que lo ubica como “ciudadano del mundo”.

Las obras de Vargas Llosa desde muy temprano se han dado a conocer en Japón y podemos leer en nuestro idioma desde las de la primera etapa, *La Casa Verde* (1965) y *Conversación en la Catedral* (1969); hasta las más recientes como *La Fiesta del Chivo* (2000) y *El paraíso en la otra esquina* (2003). Sus trabajos de crítica literaria sobre Flaubert o García Márquez nos hablan, también, de un genio nada común. Cervantes, Dickens, Balzac, Tolstoy, Conrad, Mann, Faulkner, Sartre, Camus y muchos otros escritores de primera línea nutrieron y enriquecieron su pensamiento y su estilo. Es profundamente consciente de esta herencia que conlleva ser el continuador y el promovedor de una literatura que guíe al lector a un mundo que trasciende al tiempo y al espacio a través de la imaginación. Vargas Llosa actuó como presidente del Pen Club de 1976 a 1979 y contribuyó a fortalecer la solidaridad entre los escritores del mundo. Asimismo es un intelectual que siempre ha luchado contra la violencia y la intolerancia. Prueba de ello es la correspondencia entre él y el Premio Nobel japonés, Oe Kenzaburo.

Vargas Llosa ha enseñado en muchas universidades de las Américas y de Europa, y hay varios libros suyos que comenzaron como notas para esas clases. Sus reseñas y ensayos literarios revelan el interés que tiene por la literatura universal, incluida la japonesa, y su preocupación por relacionarse con las generaciones jóvenes. Es así que Vargas Llosa es también un académico admirable, lo cual lo hace un autor cercano al ámbito universitario, algo visible por el hecho de que se le han concedido numerosos diplomas honorarios por varias universidades prestigiosas.

Vargas Llosa ha logrado en sus novelas expresar las costumbres y el caos específicos de los países de América Latina, y a través de esto ha llegado a expresar una rara universalidad y profundidad. Es precisamente gracias a esta universalidad y profundidad que sus obras han sido traducidas a diversos idiomas del mundo y que allí ha podido encontrar un sinnúmero de lectores, por lo tanto es un autor que ha trascendido las barreras de las literaturas nacionales y lo ha vuelto una de las figuras que le dan un empuje a la literatura mundial moderna. El Departamento de Literatura de La Universidad de Tokio tiene una larga historia como una institución en donde se le ha dado importancia al estudio de las literaturas nacionales, y fue en el año del 2007 que esta creó un nuevo departamento, “El Departamento de Estudios de Literatura Contemporánea” cuyos objetos de estudio son precisamente las obras de autores que, como Mario Vargas Llosa, impulsan a la literatura mundial moderna.

Para nuestro novelista la literatura es un instrumento que permite hacer sentir a un lector, de manera intensificada, las contradicciones e imperfecciones del mundo real a través de la presentación de un mundo de ficción; es al mismo tiempo un lugar en donde las personas se ven unidas en un mismo movimiento de sentimientos que van desde la sorpresa a la simpatía o al enojo, para llegar a un entendimiento que supera las barreras de las lenguas, de las costumbres y de los prejuicios; es una oportunidad de redescubrir la cultura de uno mismo mediante el contacto con un ente extraño y extranjero. Vale la pena citar lo que dijo sobre el valor de la ficción nuestro novelista durante la ceremonia de la entrega del Premio Nobel: “[La ficción] –dijo– es una necesidad imprescindible para que la civilización siga existiendo, renovándose y conservando en nosotros lo mejor de lo humano”. Por todo lo arriba mencionado resulta claro y evidente que el trabajo literario de Vargas Llosa comparte las mismas inquietudes e ideales que nuestra universidad cuya prioridad es, por un lado, ejercer diariamente el sentido crítico y enriquecer la herencia cultural; y por el otro, comprender la universalidad del ser humano, aquél que está más allá de las nacionalidades o de los idiomas.

Por los logros literarios aquí mencionados, se ha decidido que Vargas Llosa califica dentro de las pautas de esta universidad para el otorgamiento de un Doctorado honoris causa, pautas que estipulan que “el recipiente sea una persona que haya contribuido notablemente al desarrollo de la cultura académica y cuyo nombramiento por esta universidad se considere pertinente.” Por consiguiente, el rector de la Universidad de Tokio, habiendo consultado con el Consejo de Investigación Académica de la Universidad de Tokio, mediante la presente concede al señor Mario Vargas Llosa el título de Doctor honoris causa de la Universidad de Tokio.



マリオ・バルガス＝リヨサ氏講演 「文学への情熱ともうひとつの現実の創造」要旨

文学とは生計を立てる方法以上のこと、それは情熱つまり愛の行為である。それは完全に身を委ねることを要求する。書くことは生きることだ。なぜなら作家は自分より長生きする作品を書き、人生が与える経験よりも豊かで、深く、美しいものを体験させるからだ。作家は自分の中の全てを費やし、自分たちが生きている現実と平行しているが異なる現実を創造する。

人や物事からなる客観的現実と違い、文学の現実は一見はかなく見える言葉で作られる。だが、才能や希望を大きく注ぎ込むとき、作品は時間に打ち勝つ。それは未来の読者、異なる文化や言語の読者の間に連帯と友愛をもたらす。また文学は今と過去をも結びつけ、歴史や考古学、社会科学以上に、過去の人々の経験がいかなるものであったかを教えてくれる。書くことは過去そして未来の人々と対話することでもある。それによって人間とは何かを知ることができる。

文学は偏見や暴力、不正から人を守る。世界がうまく機能していないことを分からせ、私たちの内に批評精神を目覚めさせる。批評精神は民主主義と自由を守

るのに欠かせない。文学は偉大な娯楽であるとともに、人生に重要な痕跡を残す。私たちは知識が多様化し、専門化が進む時代に生きている。専門化は大事だが、人々のコミュニケーションを断つという問題も孕んでいる。科学者や技術者の世界は島を連ねたようなものだ。だから同じ経験を共有させる活動が必要であり、その一つがまさに文学なのだ。

文学とフィクションの重要性を教えてくれるのがペルー・アマゾンで出会ったマチゲング族の〈語り部〉の存在である。彼は文明化によって拡散した先住民の共同体を、様々な話を語ることで結びつけ、アイデンティティを認識させる役目を果たしていた。それはフィクションの重要性を示している。

また視聴覚機器の発達により書物が消えるとしたら、世界は内に秘められた生活を失う。それは想像と言葉によって作り出されるからだ。独裁制に、世界はよくできているから変える必要はないと思われないためにも、人々は夢想する必要がある。

(文責・野谷文昭)



問い合わせ先: 本部広報課、大学院人文社会系研究科・文学部

NEWS

春の紫綬褒章受章

伊藤隆敏教授、河岡義裕教授が本年春の紫綬褒章を受章いたしました。

伊藤 隆敏 大学院公共政策学連携研究部教授

この度、伊藤隆敏教授が、金融政策・日本経済論研究における功績により本年春の紫綬褒章を受章されました。

伊藤隆敏教授はマクロ経済学、国際経済学、日本経済論の分野で長年にわたって多大な業績をあげています。彼の業績の一つの特徴は、例えば全米経済研究所主催の東アジア経済に関するセミナーシリーズ“NBER-East Asia Seminar on Economics”を編集した20年間にわたる20冊の書物に代表されるように、標準的な経済学的手法をもってアジアや日本経済の諸問題を分析し、しかもここに一流の欧米の経済学者とともに新進のアジアの経済学者も参加させ、同地域の経済研究についての一大フォーラムを作り上げたような国際性です。教育面でも、こうした国際性は東京大学大学院公共政策学連携研究部の海外主要大学との提携や、大学院経済学研究科の英語での講義プログラム“UTIPE”に結実しています。

さらに、伊藤教授は米国ミネソタ大学、コロンビア大学、国際通貨基金等、多くの海外研究機関での教育、研究活動を進め、これらの組織での講義に彼の主要著作の一つである*The Japanese Economy*を使用し、米国の大学、学会における日本経済の正しい理解を促進してきました。

伊藤教授の国際経済学の分野における研究のもう一つの特徴は非常にきめの細かい、たとえば為替レートや株価であれば、秒単位の取引価格に関するデータを用いて、資産価格に関する経済学の標準的な仮説を検証してみせたことです。その典型例は、資産価格が投資家が保有している情報を的確に織り込んで形成されるという効率的



市場仮説が、こうした精緻なデータを分析すると必ずしも成立していないという実証結果です。このような結果はだいたい同時期に欧米の学者によっても発見されていますが、伊藤教授もその一翼を担ったことは高く評価されます。

これらの業績に対して、昭和61年日経・経済図書文化賞を受賞していますし、こうした業績をベースに大蔵省で副財務官（大臣官房参事官）、また政府の経済財政諮問会議員を務めるなど現実の政策問題にも積極的に関与を進めてきています。このように、伊藤教授は、マクロ経済学、国際経済学における基礎的な研究・教育、日本・アジア経済の分析、その国際的普及、現実の政策への応用に尽くしてきており、その功績はまことに顕著です。

これからも伊藤教授の益々のご活躍とご健勝を祈念いたします。

(大学院経済学研究科・経済学部 植田和男)

河岡 義裕 医科学研究所教授

河岡義裕教授は、ウイルスの増殖や病原性に関わる基礎研究ばかりでなく、ワクチン開発などの応用研究や、臨床と直結した薬剤耐性ウイルスの研究など、幅広く研究を展開し、それぞれの分野で極めて重要な発見をされました。これらの業績によりワクチン開発を大きく発展させ、現在火急の問題である高病原性鳥インフルエンザならびに新型インフルエンザの制圧に直接寄与されたご功績により、本年春の紫綬褒章を受章されました。

河岡教授は、世界で初めてリバーシ・ジェネティクス法によるインフルエンザウイルスの人工合成に成功されました。この画期的な技術によりH5N1ワクチンの作製が可能となり、実際2009年の新型インフルエンザのワクチン作製にもこの技術が使われました。河岡教授の業績は、世界各国で行われている新型インフルエンザ対策に大きく貢献したばかりでなく、ウイルスの増殖過程や病原性を分子レベルで解析し、ウイルスの病原性発現機構の基本概念を確立した点でも注目されています。

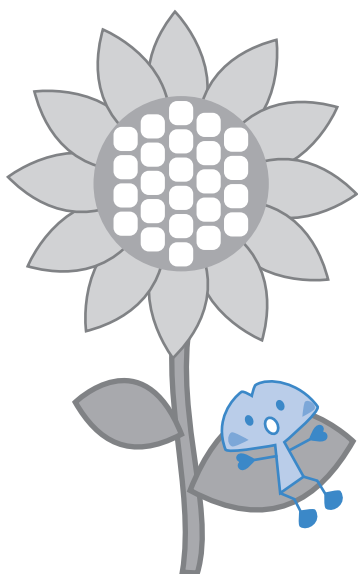
河岡教授のウイルス学上の研究業績に対しては、これまでも平成3年4月日本獣医学会賞、平成14年11月野口英世記念医学賞、平成18年4月文部科学大臣表彰科学技術賞（研究部門）、平成18年11月ロベルトコッホ賞、平成19年11月武田医学賞、平成22年4月日本農学賞・読売農学賞が贈られています。さらに、河岡教授は、厚生労働省の新型インフルエンザ対策本部専門家諮問委員会



委員をはじめ、新型インフルエンザ専門家会議委員、エイズ対策研究評価委員会委員などの要職を歴任し、国策決定にも大いに貢献されてきました。学会活動においても日本ウイルス学会理事及び評議員、日本獣医学会評議員などの要職を歴任し、各学会の発展に多大な貢献をされました。

以上のように、河岡教授は、医学ならびに獣医学の発展に尽くされ、その功績はまことに顕著であり、今後のさらなる研究のご発展をお祈り申し上げる次第です。

(医科学研究所教授 岩本愛吉)



一般ニュース



産学連携本部、高齢社会総合研究機構

東京大学ジェロントロジーコンソーシアム活動報告開催

一般

5月26日(木)に、当初3月末開催予定から延期になっていた東京大学ジェロントロジーコンソーシアムの活動報告会が、工学部2号館大講堂で開催された。これは産学連携本部の事業として2009年度から2年計画で実施してきた産学コンソーシアムによる活動で、企業45社の参加を得て、高齢社会総合研究機構が運営してきたもので、分科会も含めると延べ50回以上の会合による議論を重ねてきた。

保立和夫産学連携本部長から、新しい産学連携の形を模索するコンソーシアム事業として実施してきたもので、これから日本が直面する超高齢化への課題解決を産学で力を合わせて行うというテーマ設定は、今日の来場者の数を見ても適切であった、本学としてジェロントロジーの活動を強化していくとともに、他分野でもコンソーシアム事業を展開していきたいとの挨拶があった。



開会の挨拶をされる保立和夫産学連携本部長

続いて、コンソーシアムの主査である鎌田実高齢社会総合研究機構長から、挨拶と活動概要が紹介された。3月の大震災の被災地訪問を紹介し、被災地は既に35%程度の高齢化率の地域が多く、その復興がこれからの日本のあり方につながり、コンソーシアムでの議論が必ずやそこへ活かされるであろうと述べられた。



活動概要を述べる鎌田実高齢社会総合研究機構長

報告会ではまず、特別チームによる15回の集中討議を実施した社会保障グループによる今後の社会保障のあり方について報告があった。続いて2030年頃の望ましい日本の姿へのロードマップとその考え方を3つのチーム(ライフデザイン、医療・介護、インフラ)の各チームリーダーが報告した。会の後半では生活シナリオ検討チーム、アクションプランについての報告があり、最後に全体総括といった流れで会は進行した。

当日は350名を超える来場者が集まり、一部で立ち見が出るほどであり、この分野への関心の高さが窺えた。このコンソーシアムの活動は2年間で一区切りをつけて、2011年度からはジェロントロジーネットワークという緩やかな連携の組織体で新たな活動を始める。



コンソーシアム報告会場内の様子
熱心に活動報告を聞く来場者

本部国際企画課
「第9回プレジデント・カウンスル」
の開催
一般

6月3日(金) スイス・ジュネーブにある世界経済フォーラム本部において第9回プレジデント・カウンスル本会議が開催された。プレジデント・カウンスルは、東京大学の国際的プレゼンスの向上をめざし、そのための包括的戦略の策定と行動指針に関わる助言、ガイダンス、および支援を仰ぐため、2006年11月に総長の国際アドバイザーボードとして設置されたものである。

本会議には、タイ国チュラポーン王女殿下、チョン・ウンチャン氏、ベルトラン・コロン氏、リタ・コルウェル氏、ビル・エモット氏、ヴァルタン・グレゴリアン氏、フレデリック・ヒルマー氏、黒川清氏、カリ・レイビオ氏、クラウス・シュワブ氏、横山禎徳氏、吉野洋太郎氏、および本学からは濱田純一総長、田中明彦国際本部長、江川雅子国際副本部長、素粒子物理国際研究センター小林富雄教授が出席し、「The Role of Global Universities in the 21st Century」をテーマに、総長のスピーチ、小林教授による本学の欧州原子核研究機構(CERN)における研究紹介のプレゼンテーションのほか、お招きしたミュンヘン大学フーバー学長による欧州における高等教育機関及び研究機関に関するスピーチがあり、活発な意見交換が行われた。本会議終了後には、総長が、CERNを訪問、ロルフ・ホイヤー所長と面談し、施設見学を行った。

前日の2日(木)夕刻には、同会場において歓迎レセプションが開催された。総長とシュワブ氏の挨拶によって始まったレセプションには、本学卒業生、部局推薦による招待の学術関係者、本学と関わりのある企業関係者など、100名以上の参加があった。また、レセプションに先立ち、本学卒業生と総長との懇談会の時間が設けられた。

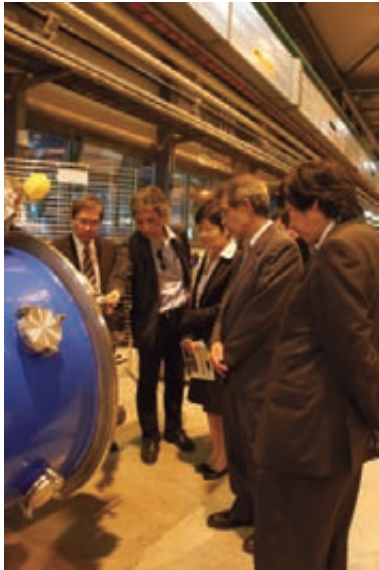
次回第10回プレジデント・カウンスルは、タイ・バンコクにおいて2012年6月21、22日に開催される予定である。



濱田総長とWEF(世界経済フォーラム)シュワブ会長



第9回プレジデント・カウンシル本会議の様子



CERN見学



生命科学ネットワーク

第11回東京大学生命科学シンポジウム開催

6月4日(土)、安田講堂及び工学部2号館にて、第11回東京大学生命科学シンポジウムが新領域創成科学研究科教授の大矢禎一実行委員長の下で開催された。生命科学ネットワークは、生命科学に関わる学内16部局で構成され、研究者交流や教科書作成などの活動を通じて、研究教育支援に取り組んでいる。

当日は晴天の下、学内外から約845名の参加があった。講演の部は松本洋一郎理事(副学長)の挨拶に始まり、本シンポジウムが「生命科学を学ぼうとする学生の皆さんへの進路選択ガイダンス」「研究者同士の異分野交流の場」「一般の皆様へ生命科学への関心を持っていただく場」となるという目的を持つこと、多様な生命科学研究の最先端を行く本学において、生命科学全般を横断する集まりは他にはなく、本ネットワークだからこそ開催できる催しであることを話された。

続く講演では、8部局から講演者の先生にお越しいただき、前半では、細胞内の構造体や物質を見ることの素

晴らしさや、我々の健康と結びつきが深い自然免疫や新しい糖鎖合成法に関する研究について発表があった。後半では、魚類や昆虫の進化に関わる研究から、双生児の研究、次世代シーケンサーを使った研究まで、生命科学の広がりや奥深さについて講演があった。参加者からは「研究の最先端に触れることができ、勉強になりました」との感想が寄せられ、広範な生命科学のエッセンスを楽しんでいただけたと思う。最後に、長澤寛道生命科学ネットワーク長(農学生命科学研究科)の挨拶で、講演の部は盛況のうちに終了した。



挨拶をする松本理事と長澤ネットワーク長

ポスターの部では前回は上回る304題の発表があった。参加者からは「他の部局や分野の様々な研究を見ることができました」と好評で、研究者の交流を促進できた。今回初の試みとして、若手研究者を対象にポスター賞を設け、各部局の教員がポスターを審査した。前回にも増して活発な議論が繰り広げられ、発表者から「モチベーションが上がりました」と好評だった。

また安田講堂ロビーの16部局の紹介ブースには、パンフレット等が展示され、学生から「進路選択の参考になりました」との感想があった。



(左) ポスター会場

(右) 長澤ネットワーク長とポスター賞受賞者

講演の部終了後、生協中央食堂にてポスター賞受賞式と懇親会が開催され、歓談に華が咲き、盛況のうちにシンポジウムは終了した。

アンケートでは回答者のほとんどが「次回もシンポジウムの企画を希望する」と回答しており、来年度の開催も前向きに検討したい。

シンポジウムのHP (<http://www.todaibio.info/>) に、講演紹介、及びポスター要旨集・ポスター賞受賞者・ポスター賞審査員の一覧(学内限定)が掲載されている。

<ポスター賞受賞者・所属>

種 良典 (工学系研究科)

宇佐美 篤 (薬学系研究科)

渡邊 可奈子 (理学系研究科)
 根岸 孝寛 (新領域創成科学研究科)
 深谷 雄志 (分子細胞生物学研究所)
 波多野 良 (医科学研究所)
 五来 武郎 (医科学研究所)
 藤田 生水 (理学系研究科)
 小嶋 良輔 (薬学系研究科)
 今村 菜津子 (薬学系研究科)
 小沼 貴裕 (農学生命科学研究科)
 山口 淳一 (新領域創成科学研究科)
 以上、12名

<ポスター賞審査員>

中村元直・喜多村和郎・小川純人・市川幹 (医学系研究科)
 金野智浩・馬渡和真 (工学系研究科)
 山下朗・伊藤恭子・朴民根 (理学系研究科)
 経塚淳子・潮秀樹・正木春彦 (農学生命科学研究科)
 若杉桂輔・道上達男・松田良一 (総合文化研究科)
 千原崇裕・秋光信佳 (薬学系研究科)
 藤原晴彦 (新領域創成科学研究科)
 長崎正朗 (情報理工学系研究科)
 斎藤春雄・伊庭英夫 (医科学研究所)
 酒井康行 (生産技術研究所)
 末次志郎・今井裕記 (分子細胞生物学研究所)
 小島茂明 (大気海洋研究所)
 渡邊克巳・児玉龍彦 (先端科学技術研究センター)
 以上、27名

本部キャリアサポート課

知の創造的摩擦プロジェクト第12
回交流会開催

一般

6月11日(土)13時から本郷キャンパス御殿下ジムナジウムにおいて、知の創造的摩擦プロジェクト第12回交流会「いまを揺さぶる、未来を創る」が開催された。

交流会は、本学学生と各界で活躍する若手卒業生との交流を通して、学生のキャリア形成支援を目指す大学主催のイベントで、2005年10月に本郷キャンパスにて第1回が開催され、第12回目となった今回は、125名の卒業生と393名の学生が参加した。

開会にあたり江川雅子理事(卒業生室担当)から、「知の創造的摩擦プロジェクトの中では最大で根幹をなすイベントである交流会も第12回を迎え、参加学生にとって異なる世代・分野の先輩たちと交流することは大変有意義なものである。また、本学では、濱田総長の下“行動シナリオ”の重点項目のひとつ「卒業生との緊密なネットワークの形成」においても卒業生とのコミュニケーションの強化を重点取り組みとしており、この交流会はまさにこの目的に沿うものであり、卒業生、学生の双方にとって有意義な場となることを願っている」と挨拶が

あった。

第一部では中規模のグループディスカッションが3回行われ、引き続き17時30分から中央食堂に会場を移して第二部(懇談会)が開かれ、19時まで熱い会話があちこちが交わされた。

本イベントの企画・運営等は、卒業生有志の集い「東大東大三四郎会」と、本学学生サークル「東大ドリームネット」との協力のもとに行われた。



江川理事による開会の挨拶



熱気に満ちた交流の輪

本部学生支援課

2011年度京都大学東京大学総合対校戦開会式開催される

一般

2011年度京都大学東京大学総合対校戦の開会式が、6月11日(土)京都大学総合体育館にて開催された。本学からは武藤芳照理事・副学長(大会副会長代理)が出席した。

開会に際して京都大学の赤松副学長(大会会長代理)から、約100年前の石川啄木の日記にも京大・東大との交流戦の記録があり、伝統ある大会である旨の挨拶がなされ、武藤理事(副学長)からは、「果敢なる闘士であればあるほど、潔い敗者であれ」とフェアプレー精神をもって大会に臨むことが大切である旨の挨拶がなされた。その後、両大学から応援演舞の披露があり、式に花を添えた。

また、開会式後にはレセプションが行われ、両大学の

関係者からそれぞれ大会の抱負が述べられ、和やかな雰囲気での交流が持たれた。

本大会は、伝統ある各部の対校戦を総合化し、今年で3回目を迎える総合体育大会であり、運営は学生によって行われている。なお、昨年度「主管破り」を許しており、本学は雪辱を果たすべく競技に臨む。



東京大学の応援演舞

現地では田植え体験やジャガイモ、タマネギ、キャベツ等の収穫作業、サツマイモの苗植え、とれたて野菜の試食など、受入先の「伝次平倶楽部」の会員農家が用意周到に楽しめる農業を演出していた。キャベツ畑では東日本大震災の影響で風評被害をこうむったという話も窺った。



風評被害をこうむったキャベツ畑にて

本部管理課

老農・船津伝次平のゆかりの地へ —追分ロッジの国際交流—

一般

明治の三老農の一人として知られる船津伝次平(1832-98)は、駒場農学校(現在の東京大学農学部)の教官として日本近代農学の発展に大きな役割を果たした、群馬県前橋市富士見町(旧富士見村)出身の篤農家である。

6月12日(日)に、追分ロッジでは相談主事(大学院農学生命科学研究科 荒木徹也准教授)と居住者である外国人研究者6名が、追分通り三面大黒天商栄会の主催する都市農村交流イベントに参加した。貸し切りバス1台が満席の状態朝7時に出発、向かう目的地は老農・船津伝次平のゆかりの地であった。



田植え体験をする追分ロッジの居住者たち

昨年に前橋市と合併した旧富士見村では、以前から都市農村交流活動を行っている。伝次平倶楽部と名付けられたのは6年前である。現在では文京区のほかに目黒区や北区とも交流事業を実施している。その伝次平倶楽部の関係者は、田植えや収穫作業を体験した後の交流会の挨拶の場で「農業は本来、もっと厳しいものです」と付け加えることも忘れなかった。

19時に、貸し切りバスの一行は予定通り出発地に帰着した。追分ロッジ居住者を含む参加者一同は、両手で持ちきれないほどの収穫野菜のお土産にご満悦な様子だった。



参加者全員で記念集合撮影

主催者である追分通り三面大黒天商栄会は、10月には現地で稲刈りを、11月13日には追分で恒例の収穫祭を企画している。こうした都市農村交流イベントは、文京区の補助を受け実施されているが、商店街の活動として全国レベルの注目を集めている。

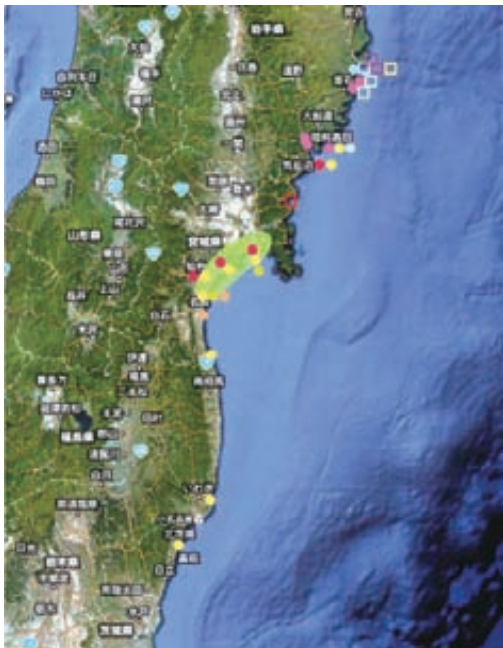
追分ログでは、今後もこうした都市農村交流イベントなどを通じて、近隣や農村地域のコミュニティとの交流を継続的に実施していきたい。

海洋アライアンス
第12回イブニングセミナー開催の報告



6月14日（火）18時から、本郷キャンパス旧理学部1号館で標記セミナーが行われた。同セミナーは、海洋アライアンスに所属するメンバーの相互理解のため、2008年から続けられている。今回は海洋アライアンスが支援する震災復興調査について以下の6件の報告が行われた。

1. 海洋アライアンスの震災復興に関する取組
 (大気海洋研究所 野村英明特任研究員)
2. 第一次隊報告
 (農学生命科学研究科 八木信行准教授)
3. 第二次隊報告
 - 1) 津波堆積物の調査
 (理学系研究科 浦辺徹郎教授・松本良教授)
 - 2) 津波到達域の調査
 (工学系研究科 高川智博助教)
 - 3) 水中ロボットを使った大槌湾の調査
 (生産技術研究所 巻俊宏准教授)
4. 津波被災地の土地利用変遷
 (理学系研究科 茅根創教授)
5. 総合討論



海洋アライアンス震災復興調査団第一-三次隊の活動範囲

- 第一次隊 ●
 第二次隊 ●●●●●●
 第三次隊 □□□□□□

最初に登壇した野村研究員（大海研）は、海洋アライアンスが震災から1週間後に推進委員を招集し、海洋からの貢献、分野を超えたシンクタンク機能の発揮、「学」としての中・長期的な提案などを確認したことを説明した。その上で調査団を派遣した経緯および第一次隊の調査概略を報告した。

続いて登場した八木准教授（農）は、一次隊の全体説明および被災の激しさについては大槌が際だっていたことなど、個々の状況についても報告した。

第二次隊の浦辺教授（理）と松本教授（理）は、堆積物をみることで、最低何回津波が襲来したかがわかること、しかし痕跡は消えてしまうので、いち早く調査しないと最大浸水域を過小評価してしまうことを報告した。

津波到達域の調査をおこなった高川助教（工）は、反射波の有無が津波高を左右し、結果として被災状況が異なってくることを報告した。

巻准教授（生研）は、水中ロボットを使った大槌湾の調査報告の中で、水中のビデオ映像及び音響調査を組み合わせ合わせた研究、実際の海底の様子を紹介した。

最後の茅根教授（理）は、文献調査に基づいて津波被災地の土地利用の変遷を示し、その上で被災要因あるいは被災を免れた場所ごとに調査が必要であることを提案した。

総合討論の時間には、湾口防波堤の役割や、平野部における防災計画、防災のあり方などに関して、予定時間を越えて活発な意見交換が行われた。今後はこれらの成果を復興支援に役立てていく所存である。参加者には大学院生も多く、震災後の社会で即戦力として活躍してくれることを期待させた。

海洋アライアンスでは正確な情報を社会に向け発信するため、4月22日に緊急ワークショップを開催しました。本紙が発行される頃には終わっているが、7月8日に「大震災からの復興への筋道」及び7月14日に「震災を科学する」のシンポジウムを開催する予定です。

詳しくはホームページ (<http://www.oa.u-tokyo.ac.jp/>) をご覧ください。



本部奨学厚生課

東京大学光イノベーション基金奨学金平成23年度受給者証書授与式を開催

光科学関連の先端企業8社のご寄附により、産学連携型の特定領域奨学金としては、平成20年度に初めて設立された「東京大学光イノベーション基金奨学金」の平成23年度受給者証書授与式が、6月21日（火）に、関係教職員及びご寄附いただいた企業各社の方々のご臨席の下に安田講堂学生部会議室で開催された。

本奨学金は、先端光科学領域の研究に従事する大学院修士課程2年生のうち、特に優秀な者に月額15万円を平成24年3月までの12ヶ月間支給することにより、その学術研究への取り組みを支援するものである。

基金へ拠出いただいているのは、ウシオ電機株式会社、オムロン株式会社、オリンパス株式会社、シグマ光機株式会社、日亜化学工業株式会社、浜松ホトニクス株式会社、株式会社ブイ・テクノロジー、富士フィルム株式会社（以上、五十音順）である。

今年度は、研究業績、成績等を厳正に審査した結果、3名が奨学金を受けるにふさわしい特に優秀な者として選考され、武藤芳照理事（副学長）から受給者に受給者証書が手渡された。

武藤理事（副学長）からは、「受給者には、本学のみならず、ご厚意をいただいた企業各社の方々も期待しています。研究に最大限の努力を傾注し、大きな成果をあげていただきたい。また、ご寄附いただいた企業各社には大変感謝しています。本学は今後も教育研究の一層の充実・発展に努力していきます」との挨拶があった。

次いで、企業各社を代表してウシオ電機(株) 森本幸裕氏から「奨学金受給者となられたことを祝福するとともに、今後、日本の科学を担う人材として、ご活躍を期待しています」との祝辞が述べられた。最後に受給者の3人からは、取り組んでいる研究内容の説明、基金拠出企業に対する謝辞とともに、本奨学金受給者としての自覚を持ち、より一層努力していく旨のスピーチがあった。



受給者との記念撮影



本部人事給与課

名誉教授の称号授与

6月21日（火）に開かれた教育研究評議会で、東京大学名誉教授称号授与規則により、次の元教授16名に名誉教授の称号を授与することになった。

部局	氏名	担当講座等
大・工	班目 春樹	原子力社会工学講座
大・工	中尾 真一	反応プロセス工学講座
大・工	内藤 廣	社会基盤サイエンス講座
大・文	上野 千鶴子	社会学講座
大・農	酒井 仙吉	比較動物医科学講座
大・農	小川 和夫	水圏生産環境科学講座
大・農	安藤 直人	材料・住科学講座
大・済	小林 孝雄	金融経済学講座
大・済	金本 良嗣	公共経済政策講座
大・養	宮下 志朗	言語態分析講座
大・養	村田 純一	科学技術基礎論講座
大・養	佐藤 良明	文化ダイナミクス講座
情理	米澤 明憲	コンピュータ科学講座
情理	武市 正人	数理情報学応用講座
情理	辻井 潤一	コンピュータ科学講座
社研	仁田 道夫	附属社会調査・データアーカイブ研究センター

平成23年度名誉教授称号授与者 16名



救援・復興支援室

「第2回ボランティア活動報告会」が開催される

6月28日（火）17時30分から、本学本郷キャンパス経済学部第1教室において、約130名の参加の下、学生及び教職員のための「第2回ボランティア活動報告会」が開催された。これは4月23日に開催した第1回目に続く活動報告会である。

開会に先立ち、東日本大震災によって尊い命を失われた多くの方々に謹んで哀悼の意を表し、黙祷を捧げた。次に、開会にあたり濱田純一総長から挨拶があり、東京大学の救援・復興支援活動の方針と大学構成員によるボ

ランティア活動への期待が述べられた。

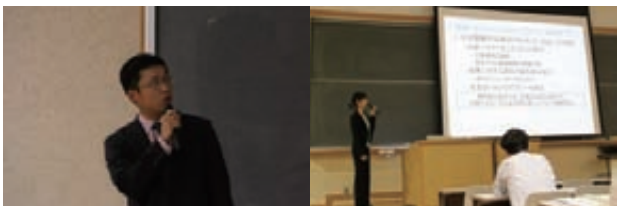
続いて、学生及び教職員からのボランティア活動報告として、法学部3年生のクー カーチャイさん、大学院医学系研究科修士課程2年生の堀越直子さん、大学院教育学研究科・教育学部の千明賢治事務長及び医科学研究所の武藤香織准教授から、それぞれが関わった団体・グループによるボランティア活動体験の様子や被災地の状況、活動を通じて感じたこと、今後の活動を考えている方々へのアドバイスなどが報告され、参加者に対して極めて有益な情報が提供された。

その後、浅野公一学生支援課長から、ボランティア活動を行うにあたっての注意事項等の説明並びに本年夏季休業期間に計画しているボランティア隊の派遣に向けて、参加者募集についての説明の後、全体を通じた質疑応答が行われた。

最後に、武藤芳照理事・副学長（救援・復興支援室ボランティア支援班担当）から閉会の挨拶があり、盛況裡に終了した。なお、7月下旬には、「ボランティア隊」参加者への説明会を予定している。



濱田総長による開会時の挨拶



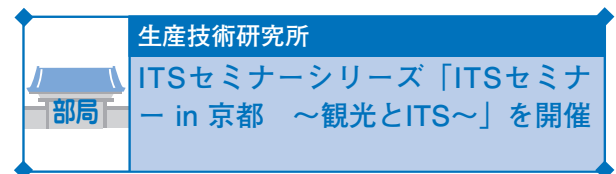
(左) クー カーチャイさんによるボランティア活動報告
(右) 保健師としての活動報告をする堀越直子さん



(左) 千明賢治事務長によるボランティア活動を行う際のアドバイスの様子
(右) 「素人のよさが生きる」と説明する武藤香織准教授



多くの学生・教職員が参加

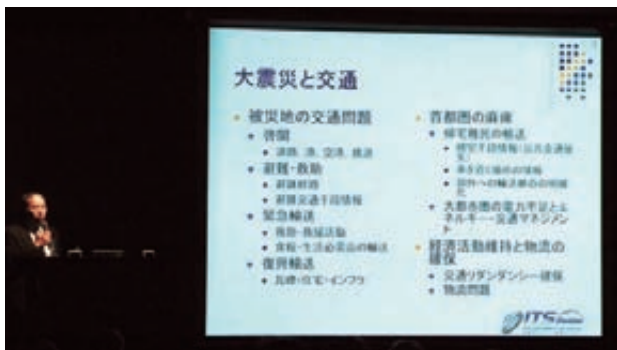


東京大学ITSセミナーシリーズ「ITSセミナー in 京都 ～観光とITS～」を4月25日（月）13時より京都大学芝蘭会館稲盛ホールにて開催した。生産技術研究所附属先進モビリティ研究センター（ITSセンター）では、研究成果の社会還元、地域のニーズに即したITS(Intelligent Transportation Systems：高度道路交通システム)の普及促進、地域の人材育成、交流を目的としたセミナーを地域のご協力のもと主催しており、前身の先進モビリティ連携研究センター時代から通算して14回を数える。

本年3月11日（金）の東日本大震災に伴い本セミナーでは「がんばれ 東北！」と題し特別セッションを設けた。須田義大ITSセンター長からは、実際に被災地に訪れた経験やITSが活用された事例の報告があり、京都大学の谷口栄一教授からは、1995年1月17日に起きた阪神・淡路大震災の経験から復旧・復興のためのITSの役割についてご講演いただき、東日本大震災の復旧のための貴重な意見交換が行われた。約100名の聴講者の主は関西圏からの参加であったため、センター長による被害調査報告を熱心に聴講していた。また、セミナーと同日に生産技術研究所主催で駒場Ⅱキャンパスにて行われた技術フォーラムでは、当センターの中野公彦准教授によりセミナーと同一の報告が行われ、関東と関西から同時に震災によるITSを活用した復旧活動の概要を発信した。

セミナー第1部講演では、センター長、当センターの池内克史教授と大口敬教授から最新の研究成果の報告があり、続いて第2部講演では、京都は観光客誘致に力をいれていることから、テーマを「観光とITS」とし、京

都の大手タクシー会社、彌榮自動車株式会社の北川雅博常務取締役、京都大学の谷口栄一教授、京都市役所の水田雅博氏、国土交通省近畿地方整備局の福岡彰三氏をお迎えし、産学官による地元のITSに関する取り組みが紹介された。第3部パネルディスカッションでは、池内克史教授をモデレータに、第2部の講演者4名に加え渡邊浩之氏（トヨタ自動車株式会社技監、NPO法人ITS Japan 会長）をお迎えし、観光-ITSの期待と京都の交通状況の問題提起から議論が行われ、さらには観光都市による災害時の対策まで討論が広がった活発なディスカッションとなった。



須田センター長による特別セッション講演



セミナー会場の様子



パネルディスカッションの様子

大学院教育学研究科・教育学部
謎の樹、教育学研究科に現る
部局

長く続いた寒さも鳴りを潜め、一転暖かな陽射しが新緑を育み始めた5月、大学院教育学研究科第一会議室の片隅に不思議な植物が姿を現した。

ほころびつつある花卉の間からピンと伸びた新芽が印象的で、少し体をくねらせながらもまっすぐに天を目指す姿は、見ている我々にその未来を想わせる。

「創成の樹Ⅱ」と名付けられたその植物は、大学院教育学研究科教育内容開発コース博士課程1年生の遠藤信也さんが制作した鉄製のオブジェである。

制作者の遠藤さんは進行性筋ジストロフィーを患っており、元々は高等学校の美術教諭をしていたという経歴がある。この作品はその当時に作られたものだが、遠藤さんが修士課程を修了した際に、感謝の気持ちとして3月24日（木）に寄贈され、5月2日（月）に設置された。5月11日（水）に開催された教授会で紹介された際には、休憩時間に多数の教員がオブジェ前に集い、口々に賞賛の言葉を贈った。「高尚で、格調が高くていいですね」とは、市川伸一教育学研究科長のコメント。

作品について遠藤さんは、「子どもたちの成長を願って、種子の発芽や花の開花のイメージに重ねて表現したものです。もう10年ほど前に制作したのですが、教育と関連がある作品だと思っています。」と解説してくれた。



作品を囲み笑顔の市川研究科長と制作者の遠藤さん

5月19日(木)18時から、カポ・ペリカーノ(医学部教育研究棟13階)にて法学政治学研究科総合法政専攻の新入生歓迎会および法学政治学研究科による外国人留学生等との懇談会が合同で開催された。

ゲストの学生、客員研究員、チューター、教職員等、総勢111名が出席し、熱気あふれるパーティとなった。

中谷和弘教授(総合法政専攻長)の司会進行で、山下友信研究科長の挨拶、西川洋一副研究科長による乾杯の後、歓談に入った。

宴たけなわになった頃、学生の代表として総合法政専攻博士課程1年生の中田裕子さんが、留学生の多い研究室で彼らの意欲的な研究姿勢が研究室全体の良い刺激になっているという話を披露した。次に、法学部3年生のクー カーチャイさん(シンガポール出身)が、流暢な日本語で東日本大震災後、母国で企画・開催したチャリティコンサートの話や宮城県石巻市でのボランティア活動の報告を行い、ボランティア活動への参加を列席者に呼びかけた。最後に、総合法政専攻修士課程1年生の柳愛林さん(韓国出身)が、同専攻博士課程2年生の大西香世さんのピアノ伴奏に合わせてエルガー作曲「愛の挨拶」をファゴットで演奏し、会場は厳かな雰囲気に包まれた。

いつも学業に忙しい学生たちだが、この日ばかりは教員や友人と大いに親睦を深め、20時の中締め後も名残惜しそうに歓談していた。



(左): 中谷教授、クーさん、山下研究科長、柳さん、中田さん、大西さん (右): 法学部3年 クー カーチャイさん



(左): 博士1年 中田裕子さん
(右) 修士1年 柳愛林さん(右)と博士2年 大西香世さん(左)

5月24日(火)、濱田純一総長による北海道北見市訪問、常呂実習施設視察が行われた。大学院人文社会系研究科附属北海文化研究常呂実習施設と北海道北見市は、旧常呂町時代に遺跡が発見されて以来長期にわたる相互の協力関係が続いており、地域交流に関する協定も締結している。

北見市長との懇談において、北見市長の「学術的な部分と北見市の観光等の産業を結び付け、他の地域にはない新たな観光資源とできないか考えている」という言葉を受け、濱田総長は「遺跡発見からこれまで、環境を整備いただき、研究を遂行していくうえで地元の人々との交流がずっと続いていることが考古学的研究の基盤となっていてありがたい。さらに北見市や遺跡の価値を高めていけるよう我々も努力したい」と応えた。そのほか、常呂実習施設内研究室の老朽化に伴う北見市埋蔵文化センタースペース貸借の問題についても話し合いがなされた。



北見市長との懇談の様子

常呂実習施設視察においては、遺跡発見者大西信武氏の御子息の大西信重氏や北見市役所職員、文学部熊木俊朗准教授等の説明を受けながら研究棟、資料陳列館、学生宿舎、北見市埋蔵文化センターを視察した後、複元された堅穴住居等を見学し、行程を終えた。

リラ冷えのする日であったが天気にも恵まれ、北見市と東京大学とのこれまで続いてきた縁を土台に、今後一層連携を強め、多面的な発展を目指す決意を新たにしたいとなった。



常呂実習施設にて



日本銀行本店前での集合写真

大学院経済学研究科・経済学部
留学生社会科見学及び懇談会を開催

5月27日（金）午後、大学院経済学研究科・経済学部では留学生社会科見学として、日本銀行貨幣博物館及び本店を見学した。留学生42名（学部生8名、修士30名、博士2名、交換留学生2名）が参加した。

日本銀行貨幣博物館では職員から概要説明を受け、各自で展示物を見学した。引き続き日本銀行本店に移動し、初めに日本銀行の役割を紹介したビデオを鑑賞した。その後、2班に分かれて、地下にある旧金庫や旧営業場、資料展示室などを見学した。金庫室のドアは頑丈で厚みが90センチもあった。この見学コースにはカメラや携帯電話は持ち込み禁止で、ロビーにあるロッカーに荷物を預け、金属探知機のゲートをくぐって建物内に入るといふセキュリティの徹底ぶりに、留学生たちも驚いていた。

18時から東天紅において懇談会が開催された。初めに吉川洋研究科長・経済学部長から挨拶があり、続いて神谷和也研究科主任の発声で乾杯した後、懇談が始まった。

懇談は、終始和やかな雰囲気につつまれて進み、教員より留学生へ多岐にわたるメッセージが送られた。最後に留学生を代表して、学部4年のニャムダワー・ツォグサグさん及び修士課程1年のエリック・ウエイマンさんから挨拶があり、20時頃盛況のうちに散会した。

留学生たちはさまざまな先生方と話をすることが出来たととても喜んでいました。翌週に実施したアンケートによると、このイベントを通して、学年、専攻の違う友人が出来て楽しかったと好評であった。



懇談会にて 乾杯！

大学院工学系研究科・工学部
工学系研究科・工学部で第2回ご父母のためのオープンキャンパス開かれる

5月28日（土）14時より、第2回ご父母のためのオープンキャンパスを実施した。

今回は大学院工学系研究科・工学部の紹介および研究室見学が行われた。紹介では、大学院工学系研究科・工学部の国際的な位置づけと、「博士」の人材育成の内容が主に説明された。研究室見学では工学系研究科ほぼ全ての専攻の見学が実施された。ご父母の皆様は大変熱心に北森武彦研究科長、光石衛学術調整室長の話を聴講され、質疑応答も盛んであった。さらに見学先では、研究に対する技術的な質問などもあり、研究の紹介をした説明員との会話を楽しんでいる様子であった。あいにくの雨模様の中であったが、事前申込者のうち、約93%に参加いただけたことから、ご父母の東京大学の教育に対する関心の高さを窺うことができた。

アンケートは55%のご父母から回答をいただいた。参加していただいたご父母の多くの皆様に博士に関心をお持ちいただき、この催しに満足度も高いという集計結果が得られた。また、北森研究科長の大学院工学系研究科・工学部紹介の説明が大変興味深かったなどの意見もいた

だき、おおむね満足されたと考えている。

本イベントは、工学部・工学系研究科に所属する学生のご父母の皆様にあし、ホームページにて申込受付を行った。5日間で多数の参加希望者が申込をされ、450名となった時点で受付を閉め切った。また、当日も約200名の申込があり、約600名にご参加いただいた。参加人数が予定した300名より多かつたことから、当初1回を3回にして実施し、予定していた16時半までのスケジュールを急遽変更し、16時45分から18時まで研究科の紹介のみを行った。また、約50名の学生に協力していただき、引率や受付にあたっていたいただいた。

各専攻の多大なるご協力に感謝致します。



大学院工学系研究科・工学部紹介を行う北森研究科長



大学院工学系研究科・工学部の教育への取り組み、特に博士課程人材育成を説明する光石学術調整室長



見学の様子

医科学研究所

部局

第38回医科学研究所創立記念シンポジウム開催される

今年で38回目となる医科学研究所創立記念シンポジウムが6月1日(水)13時から医科学研究所講堂において、「最先端医療の現状と展望」のテーマで開催された。

本シンポジウムは、医科学研究所が1967年に伝染病研究所から改組されたのを記念して、1974年から毎年創立記念日の6月1日前後に開催されてきた。

清野宏所長の開会挨拶に引き続き、本研究所先端医療研究センター今井浩三教授(附属病院長)による「抗体医薬による新治療戦略」、大阪大学微生物病研究所目加田英輔教授による「増殖因子を標的とするがん治療薬のTR」、本研究所幹細胞治療研究センター中内啓光教授による「幹細胞研究と新しい医療:iPS細胞から臓器を作る」、本学工学系研究科片岡一則教授による「ナノバイオテクノロジーが先導する診断・治療イノベーション~超分子ナノデバイスによる薬物・遺伝子のピンポイントデリバリー~」、最後に、本研究所ヒトゲノム解析センター中村祐輔教授による「がんペプチドワクチン療法の現状と展望」について、40分ずつの講演が行われた。

講演会場の講堂は、今回も所内外から多くの聴講者を迎えて満席となり、本シンポジウムへの関心の高さが窺われた。

また、本シンポジウムに先立ち、前日の5月31日(火)13時30分から講堂を会場に、本研究所所属の若手研究者による1分間スピーチ「フラッシュトーク」(研究成果発表)が例年通り開催され、若手研究者が熱心に研究成果報告を行うとともに、「研究成果ポスター発表会」が5月31日(火)~6月1日(水)の2日間、2号館講義室でフラッシュトークと連動する形で行われた。



講演を行う大阪大学微生物病研究所 目加田英輔教授



講演を行う本学工学系研究科 片岡一則教授



研究成果ポスター発表会会場

部局	大学院農学生命科学研究科・農学部
	「東日本大震災ボランティア報告会」 が開催される

6月1日(水)18時から農学部フードサイエンス棟中島董一郎記念ホールにおいて、約60名の参加者の下「大学院農学生命科学研究科・農学部東日本大震災ボランティア報告会」が開催された。

東日本大震災から2カ月余りが経過したが、今なお、多くの行方不明者や避難所生活者がおり、この間、本学部・研究科の学部学生・大学院学生・教職員もボランティアとして被災地に入り活動している。

多くの被災地では、ボランティアの力が必要不可欠なものとなっており、本学においても救援・復興支援室の遠野分室が設置されるなど、これから夏場に向け、多くの学内ボランティアが被災地の支援活動へ参加されるであろう。

本研究科では、今回の報告会を通じ、被災地の現状やボランティア活動の一端を紹介するとともに、今後ボランティア活動に参加しようと考えている皆さんの参考となるよう開催した。

報告会では、長澤寛道研究科長の挨拶に続き、学生ボランティア活動報告として、応用生命工学専攻の石崎優さん、水圏生物科学専攻の菊地遼輔さん、農学国際専攻の中村彬良さん、生物・環境工学専攻の細川総一郎さんの4人の大学院学生から、教職員ボランティア活動報告として、蔭山達矢教務課長から報告があった。

最後にボランティア活動について自由ディスカッションや質疑応答が行われ、当初予定していた時間を30分ほど超過する熱心な意見交換が行われた。



長澤研究科長開会挨拶



活動報告の様子



自由ディスカッションの様子

大学院法学政治学研究科・法学部
外国人留学生見学旅行を実施

部局

6月2日(木)・3日(金)の2日間、大学院法学政治学研究科・法学部では留学生の信州見学旅行を実施した。参加者は、留学生20名、引率の教職員4名の計24名であった。

集合はほぼ予定の時間通りで、小雨の降るなか出発予定時刻8時半に大型バスで本郷キャンパスを出発した。

午前中は移動に費やし、12時半ごろ長野県上田市にある「きのこむら深山」に到着。きのこ工場を見学した後、きのこ汁をはじめとする「きのこ御前」をおいしくいただいた。その後、バスで「信州・立岩和紙の里」に移動し、紙すき和紙のうちわを作製した。自分で紙をすいて作った純白のうちわに思い思いの絵付けをした。旅行計画当初は想像もしなかったが、今夏の節電対策にはぴったりの記念品が完成した。

15時半ごろ、別所温泉の旅館に到着し、徒歩数分の所にある北向観音堂を見学した。夕食までの時間、温泉に入ったり、温泉町を散策したり、各自自由に過ごした。夕食は懐石膳で、留学生たちは地元の旬の素材を使った品々に舌鼓を打った。夕食後は、懇親会で恒例のチーム対抗ゲームを4つ行い、約2時間大いに盛り上がった。

翌朝は、前日の天気とは打って変わって晴天だった。8時すぎに旅館を出発し、1時間くらいバスで移動し小布施に到着した。まずは、関西外国語大学の元留学生で、柘一市村酒造場の代表取締役であるセーラ・マリ・カミングスさんから若い留学生たちへの熱いメッセージを頂戴した。その後、北斎館とその周辺を足早に回って小布施を後にした。正午前に善光寺に到着し、広い境内を見学してから、宿坊で精進料理を味わった。帰りの交通はとても順調で予定通り18時40分ごろ大学に到着し、全員笑顔で解散した。

参加者に旅行のアンケートを取ったところ、印象に残ったことに善光寺の戒壇巡りを挙げる学生が一番多く、次にうちわ作り、温泉と続いた。日本の美しい自然と文化に触れ、共通の体験を通じて親睦が深まり、楽し

く有意義な時間を参加者全員で共有することができた。



紙すき和紙のうちわ製作中



北向観音堂での集合写真



罰ゲームで、はいポーズ!

大学院工学系研究科・工学部

部局

ラリー・モンテカルロ・ヒストリック参戦プロジェクト、蒲田駅前で矢口消防署消防演習に協力参加

6月4日(土)、大田区蒲田駅前で行われた東京消防庁矢口消防署の消防演習に、国際工学教育推進機構バイリンガルキャンパス推進センターの開講する工学部共通科目「創造的ものづくりプロジェクト」及び工学系研究科共通科目「創造性工学プロジェクト」の1テーマである「ヒストリックラリー参戦プロジェクト」(担当; 草

加浩平特任教授)の学生6名と、プロジェクトで修理・整備して第14回ラリー・モンテカルロ・ヒストリックを完走した1973年式トヨタTE27スプリンター・トレノが参加した。



出火した車両から救出されるドライバー

訓練は、ラリー競技が行われ、整備・給油中に携行缶から漏れたガソリンに引火したという想定で行われた。



ネット式(東京消防庁式)簡易発泡器による消火活動
(写真提供;東京消防庁 矢口消防署)

その様子はTBS・フジテレビ・ケーブルテレビ等の取材を受け、参加学生には防災意識向上に貢献したとして矢口消防署長から感謝状が贈られた。



感謝状をいただき矢口消防署の方々と記念撮影

訓練が無事終了した後もスプリンター・トレノの周り

には大勢の人だかりが出来ていた。人々が驚いたのは、目の前の車が実際にヨーロッパのラリーを走ったということ、そしてこのプロジェクトが本学の授業の一環として行われ、すべて学生の手によって運営されていることだった。

「タフさは多様さの中で鍛えられ、また、社会的なコミュニケーションの場におけるたくましさも大切である」との濱田総長の考えに基づき、学科、学部、大学、国籍の枠を超えて行われる本プロジェクトでは、関東工業自動車大学校やフランス協定校の学生と協力し、世界最大級規模のラリー・モンテカルロ・ヒストリックに真剣勝負を仕掛ける。ラリーでは極寒のフランス山中をヒストリックカーで疾走する。昨年度メンバーは見事完走を果たしただけでなく歴代日本人最高順位を獲得した。

資金調達からすべて学生主体である点、古い車から新たな価値を生み出す温故知新の考え、国際ラリーに真剣勝負を仕掛ける貪欲な精神は、国際社会で活躍するクリエイティブな人材を育てるという注目を集めている。今回の消防訓練も、モノづくりの町大田区の矢口消防署が、本学の創造的ものづくりプロジェクトの理念に賛同し、協力を持ちかけてくださったことがきっかけだ。

プロジェクトはメンバーの代替わりを行い、ラリー・モンテカルロ・ヒストリック2012に向けて新たな一歩を踏み出した。これからの活動にご期待ください。

大学院理学系研究科・理学部

大学院生出張授業プロジェクトBAP 部局 が小柴昌俊科学教育賞奨励賞を受賞

6月5日(日)、本郷キャンパス・理学部1号館小柴ホールにて、平成基礎科学財団主催、第七回小柴昌俊科学教育賞の最終選考会・表彰式が行なわれ、本学大学院生による出張授業プロジェクト、BAPが奨励賞を受賞した。

BAPは、大学院生が出身高校の高校生を対象とした出張授業を行うことを目的に、本学理学系研究科の学生が中心となって2008年に発足した学生団体である。出張授業を「文化」として全国に根付かせることを目指しており、他大学の大学院生や本学の留学生に対しても、出張授業のシステムの提供を積極的に行っている。現在までに53件の出張授業を実施し、延べ2000人以上の高校生が受講した。更なる活動のステップアップを目的として本賞への応募を行い、一次、二次選考を経て、今回の最終選考会への参加となった。

最終選考会では2010年度BAP代表の大学院理学系研究科宮武広直さんが、出張授業が高校生と大学院生の双方にもたらす教育効果について、熱のこもったプレゼンテーションで紹介した。質疑応答では、他大学への活動の普及や出身高校以外での出張授業実施に関するコメント、小柴昌俊理事長からの活動理念への賛同と激励の言葉を頂いた。残念ながら優秀賞は逃したものの、BAP

の活動理念と、ノウハウを蓄積したマニュアル「出張授業虎の巻」に代表されるシステムが選考委員からの高い評価を得て、奨励賞を受賞した。

授賞式に参加したBAPメンバーは、授業の実施に協力して頂いた高校の先生方、目を輝かせながら授業を聞いてくれた高校生に改めて感謝の意を表すと同時に、今後の活動への意気込みを新たにしていた。

最後に、BAPでは今後も出張授業を継続していく為、随時、本学全研究科の大学院生を対象に講師を募集している。興味のある方は下記ホームページをご覧ください。

大学院生出張授業プロジェクト、BAPホームページ
<http://sc.sp.s.u-tokyo.ac.jp/bap/index.html>



発表の様子 © (公財) 平成基礎科学財団



小柴理事長と宮武前代表 © (公財) 平成基礎科学財団



左から前々代表音野さん・前代表宮武さん・現代表白川さん

大学院工学系研究科・工学部 工学系等地震訓練が行われる

6月6日(月)昼休みに、工学系等(工学系研究科、情報理工学系研究科、工学部、VDEC、IML)において地震訓練が実施された。訓練は全員参加であり、教職員、学生など約2800人が参加した。地震訓練は平成11年度から毎年度行われており、今回で13回目の実施となる。本訓練は、地震発生時の対応行動を実地で体験し習得してもらうとともに、要改善事項の把握をおこなうために実施している。今年度は、3月11日に発生した東北地方太平洋沖地震の後ということもあり、多くの教職員や学生が参加し、防災意識を持って参加された方が多かった。

訓練開始予定時間の11時40分過ぎに、緊急地震速報*のチャイム音の一齐放送により訓練が始まった。まずは緊急地震速報が放送されたときの対応訓練をおこなった。地震の強い揺れが到達するまでの短い間に身の安全を確保することが重要であるが、研究室等では、棚の転倒や落下物による危険性の少ない「一時退避場所」というものを設定し、まずそこへ移動して身の安全を確保する。揺れがおさまったら、火の始末、そして避難路を確保する。続いて、工学系等対策本部からの指示により、各号館に対策部が設置されるとともに号館ごとに指定された避難場所への避難が開始された。この間、号館対策部は対策本部へ被害状況や避難状況を報告し、本部では連絡を受けた内容を記録係がボードに記入することにより、全体の状況を把握した。最後に、各避難場所で安否確認が行なわれ訓練が終了した。終了後、本部長の北森武彦工学系研究科長、本郷消防署の田中徹予防課課長補佐の講評が一齐放送で参加者に伝えられた。

毎年の訓練により、放送設備改善が行なわれているが、場所によっては放送が聞き取りにくいという報告があった。また、PHSによる災害対策本部への通報体制を変更し一本化を試みたが、事前の準備不足により繋がりにくいなどの問題点も報告されたので、来年度以降の課題としたい。

*工学系等で導入している緊急地震速報は、民放ラジオで放送される緊急地震速報を受信し放送するため、関東地区で震度5強以上の地震が予測される場合に一齐放送される。



安否確認訓練中の参加者



各号館から受けた連絡事項を本部のボードに記入する



訓練終了後、講評する北森工学系研究科長

生産技術研究所
 国際シンポジウム「International Symposium on ITS Research 2011 in Taiwan」を開催

台湾の国立台湾大学にて6月11日（土）10時より先産技術研究所附属先進モビリティ研究センター（ITSセンター）と台湾大学主催でシンポジウムが開催された。本シンポジウムは、ITSセンターと研究協力協定先の大学が主催で行っており、2008年からはITS Asia-Pacific ForumのSpecial Academic Programとして開催しており、今年はシンガポール、バンコクに続いて3回目となる。ITS（Intelligent Transportation Systems：高度道路交通システム）の発展のために情報、交通、機械工学の研究分野の融合と国を越えた共同活動がより重要となっていることから、日本、中国、韓国、台湾、シンガポール、オーストラリア、USAの7か国14名の専門家をお迎えし、各国のITSの情勢報告と意見交換を行った。シンポジウムは分野ごとに4部構成で、参加者は115名であった。

当センターの大口敬教授の司会で始まり、開会には、須田義大ITSセンター長と台湾大学土木工学長Liang-Jenq Leu教授、ITS Japan常務理事の天野肇氏、ITS Taiwan副会長S. K. Jason Chang教授からご挨拶をいただいた。第1部「ITS Implementation & ITS for Emergency」は、当初ITS Implementationのみだったが、本年3月11日の東日本大震災の関心から、まずセンター長が実際に被災地に訪れた経験が紹介され、被災状況を目にした聴講者は熱心に耳を傾けていた。さらに日本で震災時にITS技術が活用された事例報告があった。続いて台湾のTang-Hsien Chan教授、韓国のSeungjae Lee教授、中国のNan Zou教授から各国における最新のITS技術の報告と震災が起こった際のITS技術活用の紹介がされた。第2部「Vehicle Control」では、アメリカのChing-Yao Chan教授、台湾のTsu-Tian Lee教授とFu-Cheng Wang准教授から自動運転やITS導入の成果報告、第3部「Image Processing and Communication」では、台湾のRen C. Luo教授、台湾の産業界からDavid W. Wang氏、当センターの池内克史教授からITS技術に欠かせない画像処理の最新技術、第4部「Traffic Management」では、オーストラリアのEdward Chung教授、アメリカのYi-Chang Chiu准教授、シンガポールのDer-Horng Lee准教授、当センターの桑原雅夫兼任教授からITSプローブデータを用いた分析と交通シミュレーションについての講演があり、各部ともフロアからの質疑が多数あり、予定していた終了時間を延長した充実したシンポジウムとなった。



須田センター長とITS Japan天野氏（右上）と
ITS Taiwan S. K. Jason教授（右下）による開会の挨拶



シンポジウム会場の様子



登壇者による記念撮影

大学院新領域創成科学研究科

第3回新領域創成科学研究科「市民講座」開催

「震災後の生活をより安心して暮らすために」というテーマで開催されている新領域創成科学研究科主催「市民講座」は第3回目を迎え、「海溝型巨大地震～海底下で何が起きているのか?」という演題で自然環境学専攻（大気海洋研究所兼務）芦寿一郎准教授の講演があった。第1回は電力、第2回は放射線というかなり生活に密接した内容で行われたこの「市民講座」第3回目は、学術的な色合いの濃い内容とした。勿論この震災の一番基本的な自然現象に関する講義内容ではあるが、興味を持ってもらえるか不安な部分もあったが、結果的に91名の参加者があり、かなり専門的な質問も多く出て、一種アカデミックな雰囲気を味わえる「市民講座」となった。

講演の冒頭で、有史以来、巨大地震の多くは海溝型地

震であり、1995年に発生した兵庫県南部地震（阪神淡路大震災）のような直下型地震とは区別するというお話から始まった。海溝型巨大地震の研究において一番重要なのは、海洋プレートの沈み込み状態（位置）を精度よくモニターすることである。水深3000m以上の深海になるとかなり難しい問題も多くあるが、深海底におけるGPSと音響を用いたモニタリングが行われ、かなり詳しい海底の動きを捉えることが今回できた、との説明があった。

今回の東北地方太平洋沖地震の場合、地震波の観測結果から、最初に日本海溝の断層面での破壊が震源から深い方向に進んだ後、その後海溝内の浅い部分にその破壊が大きく広がり、そして深い方向でまた破壊が進んだということが分かった。この破壊の引き金になったのは長年の海洋プレートの西側への沈み込みによる歪エネルギーである。測定結果から、日本海溝周辺の地震前後の海底地形の変形もかなり分かってきており、どの断層が今回滑った（破壊した）かがある程度予想できているとのことであった。

地震発生の規模を示すマグニチュードという単位は、気象庁マグニチュードMjとモーメントマグニチュードMwという2つの単位系があり、今回の巨大地震では、国際標準単位であるモーメントマグニチュード9という数字に至るまでに二転三転した。この発生規模に関しては、芦准教授の柏近隣の地図を用いたマグニチュード2から9までの表現により、いかにマグニチュード9がとてつもない大きさであるかを理解することができた。今回の東北地方太平洋沖地震は震源域の長さ500kmで幅200km程度で、平均すべり量が20mぐらいあったと思われる。マグニチュードが1違うだけでエネルギー量は約30倍以上も違う。阪神淡路大震災がマグニチュード7なので、約100倍ものエネルギーとなる。

聴講者の知りたい事の1つが「地震予知」の可能性であるが、例えば±100年単位の予測しかできない場合もあるとのことであった。ただ、現在実施されている「緊急地震速報」のような地震波の伝達速度の違いを利用した速報に近い発想で、想定震源付近の各種情報を海底ケーブルでリアルタイムに監視するシステムに注目が集まっているという。また、3月11日の本震の2日前の「前震」とみられる地震以降、海底で地殻変動が継続的に観測されていた。これを巨大地震の発生に先行する現象として利用できれば非常に有効な速報が出せることになるとのことなので大いに期待される。



新領域自然環境学専攻の芦准教授



かなり専門的な質疑応答が交わされた

キャンパス ニュース



キャンパス

本部キャリアサポート課

平成22年度学部卒業者及び大学院修了者の就職状況

学部卒業者は3,142人、そのうち就職者は1,021人(32.5%)、非就職者は2,121人(67.5%)。非就職者の大半が大学院進学者(1,762人)で、卒業者数に対する大学院進学者数の比率は56.1%と就職者数の比率32.5%を上回っている。

大学院修士課程修了者は2,948人、そのうち就職者は1,765人(59.9%)、非就職者は1,183人(40.1%)。非就職者のうち大学院博士課程への進学者等は933人である。

大学院専門職学位課程修了者は412人、そのうち就職者は119人(28.9%)、非就職者は293人(71.1%)。

大学院博士課程修了者(満期退学者を含む)は1,582人、そのうち就職者は637人(40.3%)、非就職者は945人(59.7%)。

なお、日本学術振興会の特別研究員等は非就職者としてカウントしてある。

表1-1 学部卒業者の就職状況

表1-2 修士課程修了者の就職状況

表1-3 専門職学位課程修了者の就職状況

表1-4 博士課程修了者の就職状況

表2-1 学部卒業者の卒業後の状況

表2-2 大学院修了者の修了後の状況

表3 就職状況の推移(過去10年間)

参考 産業別就職者数の推移(平成18~22年度)

平成23年5月1日現在

表1-1 平成22年度学部別卒業者の就職状況

区分	学部別		医学部		工学部	文学部	理学部	農学部		経済学部	教養学部	教育学部	薬学部	合計	比率 (%)	昨年度 比率(%)
	法学部	医学部	医学	健康看護				農学	獣医学							
学部卒業生数(A)	417 (99)	92 (15)	17 (8)	956 (87)	370 (132)	293 (31)	234 (46)	33 (11)	367 (63)	184 (59)	101 (43)	78 (22)	3,142 (616)	100.0 (100.0)	100.0 (100.0)	
就職者数(B)	185 (41)		7 (6)	111 (15)	218 (78)	12 (3)	52 (10)	20 (8)	282 (48)	72 (33)	61 (28)	1 (1)	1,021 (270)	32.5 (43.8)	30.7 (39.7)	
その他(A-B)	232 (58)	92 (15)	10 (2)	845 (72)	152 (54)	281 (28)	182 (36)	13 (3)	85 (15)	112 (26)	40 (15)	77 (22)	2121 (346)	67.5 (56.2)	69.3 (60.3)	
学部再入学等	4			1		6 (2)	4 (2)	3	4	1	1 (1)	6 (2)	30 (7)	1.0 (1.1)	0.8 (0.8)	
大学院進学	173 (44)	1	8 (1)	806 (70)	94 (32)	259 (26)	172 (34)	8 (2)	47 (7)	98 (20)	27 (7)	69 (19)	1,762 (262)	56.1 (42.5)	53.1 (40.5)	
臨床研修医		84 (15)						2 (1)					86 (16)	2.7 (2.6)	2.6 (3.5)	
上記以外	55 (14)	7	2 (1)	38 (2)	58 (22)	16	6	0	34 (8)	13 (6)	12 (7)	2 (1)	243 (61)	7.7 (9.9)	12.8 (5.5)	

() 内は、女子を示し内数である。

平成23年5月1日現在

表1-2 平成22年度大学院(修士課程) 研究科別修了者の就職状況

区分	研究科別	人文 社会系	教育学	法学 政治学	経済学	総合文化	理学系	工学系	農学生命 科学	医学系		薬学系	数理科学	新領域 創成科学	情報 理工学系	学際情報	合計	比率 (%)	昨年度 比率(%)
										保健学	医科学								
課程修了者数(A)		108 (56)	84 (36)	18 (8)	59 (9)	227 (98)	327 (54)	897 (121)	281 (92)	51 (42)	19 (8)	90 (32)	38 (1)	466 (111)	199 (11)	84 (25)	2,948 (704)	100.0 (100.0)	100.0 (100.0)
就職者数(B)		26 (14)	35 (15)	5 (3)	31 (3)	89 (40)	141 (25)	669 (79)	185 (59)	25 (21)	3 (2)	37 (21)	15 (0)	310 (60)	152 (5)	42 (11)	1,765 (358)	59.9 (50.9)	58.5 (52.4)
その他(A-B)		82 (42)	49 (21)	13 (5)	28 (6)	138 (58)	186 (29)	228 (42)	96 (33)	26 (21)	16 (6)	53 (11)	23 (1)	156 (51)	47 (6)	42 (14)	1,183 (346)	40.1 (49.1)	41.5 (47.6)
学部再入学等			1			1 (1)	1	1 (1)	3 (1)	1 (1)		4 (1)	1	5 (3)			18 (7)	0.6 (1.0)	0.3 (0.6)
博士課程進学等		69 (33)	39 (18)	13 (5)	20 (4)	105 (42)	175 (25)	178 (30)	73 (20)	14 (11)	16 (6)	46 (9)	20 (1)	104 (30)	35 (4)	26 (9)	933 (247)	31.6 (35.1)	30.4 (32.8)
上記以外		13 (9)	9 (3)	0 (0)	8 (2)	32 (15)	10 (4)	49 (12)	20 (12)	11 (9)	0 (0)	3 (1)	2 (0)	47 (18)	12 (2)	16 (5)	232 (92)	7.9 (13.1)	10.8 (14.2)

() 内は、女子を示し内数である。

表1-3 平成22年度大学院 (専門職学位課程) 研究科別修了者の就職状況 平成23年5月1日現在

区分	法学政治学		工学系		医学系		公共政策学	合計	比率(%)	昨年度比率(%)
	法曹養成	原子力	原子力	公共健康	公共健康					
課程修了者数(A)	268 (94)	18 (0)	24 (13)	102 (31)	412 (138)	100.0 (100.0)	100.0 (100.0)			
就職者数(B)	9 (1)	18 (0)	12 (4)	80 (24)	119 (29)	24.8 (21.8)	24.8 (21.8)			
その他(A-B)	259 (93)	0 (0)	12 (9)	22 (7)	293 (109)	71.1 (79.0)	75.2 (78.2)			
学部再入学等	2			1 (0)	3 (0)	0.7 (0.0)	0.2 (0.6)			
博士課程進学等	1		8 (6)	3 (1)	12 (7)	2.9 (5.1)	3.2 (6.4)			
上記以外	256 (93)	0 (0)	4 (3)	18 (6)	278 (102)	67.5 (73.9)	71.7 (71.2)			

() 内は、女子を示し内数である。

表1-4 平成22年度大学院 (博士課程) 研究科別修了者の就職状況

区分	研究科別	人文 社会系	教育学	法学 政治学	経済学	総合 文化	理学系	工学系	農学生命科学		医学系		薬学系	数理学 科学	新領域 創成科学	情報理 工学系	学際 情報	合計	比率 (%)	昨年度 比率(%)
									農学	獣医学	保健学	医学								
課程修了者数(A)		151 (65)	58 (25)	32 (11)	36 (8)	181 (65)	186 (25)	249 (43)	134 (38)	12 (3)	46 (31)	194 (68)	50 (13)	21 (1)	144 (35)	62 (6)	26 (10)	1,582 (447)	100.0 (100.0)	100.0 (100.0)
就職者数(B)		40 (20)	36 (17)	10 (5)	27 (5)	45 (16)	44 (8)	113 (17)	41 (8)	4 (1)	21 (15)	97 (30)	32 (8)	2 (1)	81 (18)	36 (4)	8 (2)	637 (175)	40.3 (39.1)	37.6 (35.7)
その他(A-B)		111 (45)	22 (8)	22 (6)	9 (3)	136 (49)	142 (17)	136 (26)	93 (30)	8 (2)	25 (16)	97 (38)	18 (5)	19 (0)	63 (17)	26 (2)	18 (8)	945 (272)	59.7 (60.9)	62.4 (64.3)
学部/大学院 再入学等		8 (5)				2 (1)	4 (1)	2 (1)	1 (1)	1 (1)		3 (2)						21 (7)	1.3 (1.6)	1.0 (0.7)
臨研修修医												4 (2)						4 (2)	0.3 (0.4)	0.1 (0)
上記以外		103 (40)	22 (8)	22 (6)	9 (3)	134 (49)	138 (16)	134 (26)	92 (29)	7 (2)	25 (16)	90 (36)	18 (5)	19 (2)	63 (16)	26 (2)	18 (8)	920 (262)	58.2 (58.6)	61.4 (63.6)

() 内は、女子を示し内数である。
博士課程満期退学を含む。

平成23年5月1日現在

表2-1 平成22年度学部卒業者の卒業後の状況

平成23年5月1日現在

区分	学部	法	医		工	文	理	農		経済	教養	教育	薬	合計
			医学	健看				農学	獣医					
平成22年度卒業者		417 (99)	92 (15)	17 (8)	956 (87)	370 (132)	293 (31)	234 (46)	33 (11)	367 (63)	184 (59)	101 (43)	78 (22)	3,142 (616)
進学者数	大学院	173 (44)	1 (0)	8 (1)	806 (70)	94 (32)	259 (26)	172 (34)	8 (2)	47 (7)	98 (20)	27 (7)	69 (19)	1,762 (262)
	学部	4 (0)	0 (0)	0 (0)	1 (0)	0 (0)	6 (2)	4 (2)	3 (0)	4 (0)	1 (0)	1 (1)	6 (2)	30 (7)
	小計	177 (44)	1 (0)	8 (1)	807 (70)	94 (32)	265 (28)	176 (36)	11 (2)	51 (7)	99 (20)	28 (8)	75 (21)	1,792 (269)
就職者数	農業、林業	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	1 (0)	1 (1)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	2 (1)
	漁業	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)
	鉱業、採石業、 砂利採取業	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	1 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	1 (0)
	建設業	1 (0)	0 (0)	0 (0)	5 (2)	2 (1)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	1 (1)	1 (1)	0 (0)	10 (5)
	製造業	18 (3)	0 (0)	1 (1)	25 (2)	32 (10)	1 (0)	6 (0)	4 (2)	43 (7)	9 (7)	9 (6)	0 (0)	148 (38)
	電気・ガス・ 熱供給・水道業	3 (2)	0 (0)	0 (0)	4 (0)	6 (3)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	5 (2)	0 (0)	1 (0)	0 (0)	19 (7)
	情報通信業	10 (4)	0 (0)	1 (0)	17 (4)	60 (23)	4 (1)	6 (1)	1 (0)	23 (5)	9 (3)	3 (1)	0 (0)	134 (42)
	運輸業、郵便業	9 (0)	0 (0)	0 (0)	6 (1)	5 (3)	1 (0)	1 (0)	0 (0)	11 (1)	6 (4)	4 (1)	0 (0)	43 (10)
	卸売業・小売業	18 (6)	0 (0)	0 (0)	8 (0)	15 (5)	0 (0)	11 (3)	1 (1)	29 (5)	9 (4)	4 (1)	0 (0)	95 (25)
	金融業・保険業	45 (10)	0 (0)	1 (1)	14 (1)	22 (10)	0 (0)	14 (4)	0 (0)	103 (13)	10 (4)	10 (6)	1 (0)	220 (49)
	不動産業、物品賃 貸業	4 (1)	0 (0)	0 (0)	5 (0)	6 (2)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	7 (2)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	22 (5)
	学術研究、専門・ 技術サービス業	4 (1)	0 (0)	0 (0)	4 (2)	22 (5)	1 (0)	1 (0)	1 (1)	20 (3)	8 (2)	1 (1)	0 (0)	62 (15)
	宿泊業、飲食サー ビス業	0 (0)	0 (0)	0 (0)	1 (1)	2 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	3 (1)
	生活関連サービス 業、娯楽業	3 (0)	0 (0)	0 (0)	2 (1)	2 (1)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	2 (1)	1 (0)	1 (0)	0 (0)	11 (3)
	教育・学習支援業	2 (1)	0 (0)	0 (0)	1 (0)	10 (4)	1 (1)	1 (1)	1 (0)	1 (1)	2 (1)	4 (1)	0 (0)	23 (10)
	医療、福祉	1 (0)	0 (0)	5 (4)	0 (0)	1 (0)	0 (0)	0 (0)	2 (0)	0 (0)	1 (1)	1 (1)	0 (0)	11 (6)
	複合サービス事業	3 (2)	0 (0)	0 (0)	1 (0)	2 (1)	0 (0)	1 (0)	2 (1)	0 (0)	3 (0)	2 (1)	0 (0)	14 (5)
	サービス業	4 (1)	0 (0)	0 (0)	5 (0)	8 (3)	0 (0)	0 (0)	1 (1)	0 (0)	2 (1)	4 (1)	0 (0)	24 (7)
	公務	55 (7)	0 (0)	1 (1)	10 (1)	18 (6)	3 (1)	7 (1)	4 (1)	35 (8)	11 (5)	16 (7)	0 (0)	160 (38)
	その他の企業等	5 (3)	0 (0)	0 (0)	3 (0)	5 (1)	1 (0)	3 (0)	2 (0)	2 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	21 (4)
小計	185 (41)	0 (0)	9 (7)	111 (15)	218 (78)	12 (3)	52 (10)	20 (8)	282 (48)	72 (33)	61 (28)	1 (0)	1,023 (271)	
臨床研修医	0 (0)	84 (15)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	2 (1)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	86 (16)	
その他	55 (14)	7 (0)	2 (1)	38 (2)	58 (22)	160	6 (0)	0 (0)	34 (8)	13 (6)	12 (7)	2 (1)	243 (61)	
合計	417 (99)	92 (15)	19 (9)※	956 (87)	370 (132)	293 (31)	234 (46)	33 (11)	367 (63)	184 (59)	101 (43)	78 (22)	3,144 (617)	

() 内は女子で内数。

※は就職したまま卒業した者を含む。(就職したまま卒業した者のうち進学した者は、「進学者数」と「就職者数」の双方に示す。)

表3 就職状況の推移（過去10年）

	13年度	14年度	15年度	16年度	17年度	18年度	19年度	20年度	21年度	22年度
学部卒業者数	3,407	3,380	3,416	3,250	3,298	3,264	3,228	3,093	2,983	3,142
就職者数	1,111	1,103	953	948	1,069	1,120	1,071	997	915	1,021
卒業者数に対する就職者数の比率(%)	32.6	32.6	27.9	29.2	32.4	34.3	33.2	32.2	30.7	32.5
非就職者数	2,296	2,277	2,463	2,302	2,229	2,144	2,157	2,096	2,068	2,121
卒業者数に対する非就職者数の比率(%)	67.4	67.4	72.1	70.8	67.6	65.7	66.8	67.8	69.3	67.5
修士課程修了者数	2,482	2,673	2,711	2,719	2,732	2,865	2,884	2,933	2,982	2,948
就職者数	1,213	1,368	1,334	1,380	1,503	1,665	1,673	1,725	1,743	1,765
修了者数に対する就職者数の比率(%)	48.9	51.2	49.2	50.8	55.0	58.1	58.0	58.8	58.5	59.9
非就職者数	1,269	1,305	1,377	1,339	1,229	1,200	1,211	1,208	1,239	1,183
修了者数に対する非就職者数の比率(%)	51.1	48.8	50.8	49.2	45.0	41.9	42.0	41.2	41.5	40.1
専門職学位課程修了者数					271	380	399	427	435	412
就職者数					82	92	112	118	108	119
修了者数に対する就職者数の比率(%)					30.3	24.2	28.1	27.6	24.8	28.9
非就職者数					189	288	287	309	327	293
修了者数に対する非就職者数の比率(%)					69.7	75.8	71.9	72.4	75.2	71.1
博士課程修了者数	1,388	1,371	1,532	1,458	1,547	1,619	1,575	1,613	1,573	1,582
就職者数	635	591	586	537	631	567	723	727	591	637
修了者数に対する就職者数の比率(%)	45.7	43.1	38.3	36.8	40.8	35.0	45.9	45.1	37.6	40.3
非就職者数	753	780	946	921	916	1,052	852	886	982	945
修了者数に対する非就職者数の比率(%)	54.3	56.9	61.7	63.2	59.2	65.0	54.1	54.9	62.4	59.7

参考 学部卒業者及び大学院修了者の産業別就職者数の推移(平成18年度～平成22年度)

	18年度				19年度				20年度				21年度				22年度			
	学部	修士	専門職学位	博士	学部	修士	専門職学位	博士	学部	修士	専門職学位	博士	学部	修士	専門職学位	博士	学部	修士	専門職学位	博士
農業、林業		3 (1)			1 (1)				5 (3)				5 (1)	4 (2)		1	2 (1)	2		1 (1)
漁業																				1
鉱業、採石業、 砂利採取業	5	7 (1)	0	1	1	2		1	6 (1)				3 (1)	5 (1)			1	11		1
建設業	13 (3)	59 (11)		5 (1)	12 (3)	64 (14)	1	9 (1)	19 (2)	54 (12)	1 (1)	2	11 (3)	61 (14)		9 (1)	10 (5)	79 (16)		9 (1)
製造業	153 (33)	710 (112)	6 (1)	151 (27)	164 (44)	747 (132)	8 (1)	127 (15)	151 (29)	730 (130)	5 (1)	141 (14)	126 (26)	720 (134)	6 (1)	129 (23)	148 (38)	683 (118)	13 (4)	119 (17)
電気、ガス・熱 供給・水道業	21 (4)	39 (6)	7	1	17 (2)	37 (3)	7	4	24 (6)	40 (2)	7	5 (1)	24 (6)	51 (9)	6	5	19 (7)	61 (6)	10	2
情報 通信業	159 (46)	210 (29)	7 (4)	24	151 (49)	192 (37)	5 (1)	23	123 (52)	209 (46)	14 (8)	34 (3)	135 (40)	230 (52)	9 (3)	25 (5)	134 (42)	254 (44)	8 (3)	36 (4)
運輸業、 郵便業	38 (4)	46 (8)			28 (5)	43 (4)	1	2	31 (3)	51 (6)	1	1	37 (10)	55 (6)	3		43 (10)	43 (4)		3
卸売業・ 小売業	66 (21)	39 (4)	1	6 (3)	80 (24)	44 (7)	3	1 (1)	81 (18)	48 (6)	2 (1)	3	48 (13)	48 (6)	3 (1)		95 (25)	42 (4)	2 (1)	4 (2)
金融業・ 保険業	280 (54)	159 (26)	16 (7)	13 (2)	263 (58)	172 (20)	17 (7)	16 (2)	210 (40)	171 (28)	20 (2)	9 (3)	188 (40)	134 (16)	13 (3)	8 (1)	220 (49)	140 (17)	17 (6)	3
不動産業、 物品賃貸業	15 (2)	12 (2)	2		20 (6)	14 (6)	2 (1)	1 (1)	11	6 (1)		1	15 (4)	9 (1)			22 (5)	7 (1)		
学術研究、専門・ 技術サービス業									119 (28)	102 (34)	12 (3)	138 (33)	82 (24)	137 (43)	9 (7)	83 (29)	62 (15)	142 (46)	11 (1)	131 (31)
宿泊業、 飲食サービス業	2 (1)	2 (1)	1		0	1			3 (1)	1			5 (2)	3			3 (1)	4		
生活関連サー ビス業、娯楽業									12 (3)	5 (1)			6 (3)	12		2 (1)	11 (3)	9 (2)		1
教育・学習 支援業	21 (8)	46 (14)	5	163 (45)	22 (10)	36 (15)	5 (2)	240 (52)	38 (10)	67 (29)	7 (3)	254 (44)	34 (13)	48 (15)	3 (2)	197 (64)	23 (10)	58 (30)	3	210 (84)
医療、福祉	2 (2)	5 (4)		72 (28)	6 (3)	12 (8)	3 (1)	62 (22)	4 (2)	11 (7)	7 (3)	86 (24)	8 (5)	23 (17)	12 (4)	72 (18)	11 (6)	27 (16)	9 (2)	70 (24)
複合サービス 事業	2	33 (4)	2	7 (1)	4 (1)	24 (5)		178 (46)	6	33 (8)		5	7 (2)	17 (7)		4 (2)	14 (5)	20 (5)		3 (2)
サービス業	182 (57)	172 (59)	16 (5)	90 (24)	143 (40)	186 (54)	17 (5)	12 (5)	33 (6)	76 (16)		10 (2)	15 (7)	34 (11)		5	24 (7)	29 (12)	2 (1)	10 (2)
公務	137 (34)	104 (25)	26 (7)	24 (3)	146 (35)	56 (11)	38 (9)	22 (5)	114 (35)	93 (22)	37 (11)	15 (3)	148 (37)	114 (25)	38 (12)	33 (10)	160 (38)	122 (29)	40 (10)	18 (3)
その他の 企業等	24 (6)	19 (4)	3	10 (2)	13 (4)	43 (14)	5 (3)	26 (10)	17 (5)	17 (5)	5 (3)	23 (1)	18 (4)	38 (13)	6 (1)	18 (4)	21 (4)	32 (8)	4 (1)	15 (4)
合計	1,120 (275)	1,665 (311)	92 (24)	567 (136)	1,071 (285)	1,673 (330)	112 (30)	723 (160)	997 (240)	1,725 (357)	118 (36)	727 (128)	915 (241)	1,743 (372)	108 (34)	591 (158)	1,023 (271)	1,765 (358)	119 (29)	637 (175)

※平成18年度及び平成19年度のサービス業には、学術研究、専門・技術サービス業及び生活関連サービス業、娯楽業を含む。
()内は女子で、内数である。

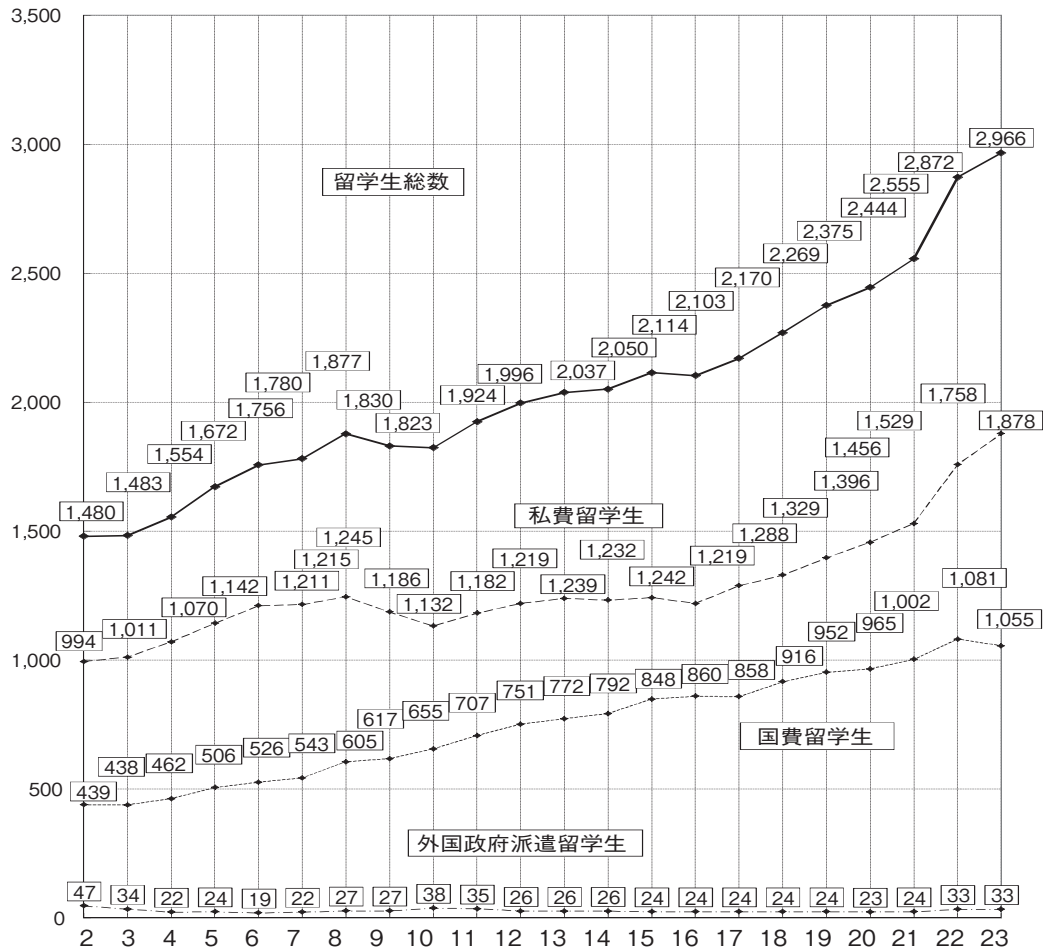


平成23年度外国人学生数—国費外国人留学生数1,055人、私費外国人留学生数1,878人
外国政府派遣留学生数33人、その他の外国人学生（在日外国人学生）数288人—

本学では、毎年5月と11月の年2回、同月1日現在の外国人学生数を調査している。これをもとに各年度5月1日現在の外国人留学生数の推移を示した。また、本年5月1日現在の外国人学生数は次頁以降のとおりである。

東京大学外国人留学生受入数の推移 (各年度5月1日現在)

本部留学生・外国人研究者支援課調



全学生数に対する外国人留学生数の比率

事項	A 全学生数 (人)	B 日本人学生数 (人)	C 外国人留学生 (人)	C/A 比率	平成22年度 比率
学部レベル	14,236	13,825	276	1.94%	2.07%
大学院レベル	14,477	11,634	2,690	18.58%	17.70%
計	28,713	25,459	2,966	10.33%	9.95%

※全学生数欄には「その他の外国人学生」(在日外国人学生)を含む。

※学部レベル学生数(全学生数及び外国人留学生数)には、学部特別聴講学生30名を含む。

※大学院レベル学生数(全学生数及び外国人留学生数)には、大学院特別聴講学生23名を含む。

※研究所に所属する研究生23名は、大学院レベル学生数(全学生数)を含む。

そのうち12名は、外国人留学生数にも含む。

※比率欄の数は四捨五入。

平成23年度外国人学生数

平成23年5月1日現在

区 分	学部				大学院								研究所等		合 計			
	学生		研究生等		修士課程		専門職 学位課程		博士課程		外国人 研究生等		大学院 研究生		研究生			
	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女
国費 (a)	73	38	0	0	161	114	4	3	329	194	83	56	0	0			650	405
	111		0		275		7		523		139		0				1055	
外国政府派遣 タイ	4	4	0	0	2	2	0	0	4	0	0	0	0	0			10	6
	8		0		4		0		4		0		0				16	
外国政府派遣 マレーシア	0	0	0	0	2	0	0	0	2	0	0	0	0	0			4	0
	0		0		2		0		2		0		0				4	
外国政府派遣 シンガポール	4	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0			4	1
	5		0		0		0		0		0		0				5	
外国政府派遣 韓国	7	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0			7	0
	7		0		0		0		0		0		0				7	
外国政府派遣 アラブ首長国連邦	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0			1	0
	1		0		0		0		0		0		0				1	
計 (b)	16	5	0	0	4	2	0	0	6	0	0	0	0	0			26	7
	21		0		6		0		6		0		0				33	
私費 (c)	35	35	20	15	320	270	9	18	459	373	109	105	9	5	4	3	965	824
	70		35		590		27		832		214		14		7		1789	
小計 (d) ((a) + (b) + (c)) (在留資格「留学」の者)	124	78	20	15	485	386	13	21	794	567	192	161	9	5	4	3	1641	1236
	202		35		871		34		1361		353		14		7		2877	
私費 (e) (在留資格「留学」以外の者)	23	16	0	0	3	3	0	0	15	12	6	6	0	0	3	2	50	39
	39		0		6		0		27		12		0		5		89	
外国人留学生合計 (f) ((d) + (e))	147	94	20	15	488	389	13	21	809	579	198	167	9	5	7	5	1691	1275
	241		35		877		34		1388		365		14		12		2966	
永住者等 (g)	103	32	0	0	56	19	5	2	34	33	2	0	1	1	0	0	201	87
	135		0		75		7		67		2		2		0		288	
外国人学生総計 (f+g)	250	126	20	15	544	408	18	23	843	612	200	167	10	6	7	5	1892	1362
	376		35		952		41		1455		367		16		12		3254	

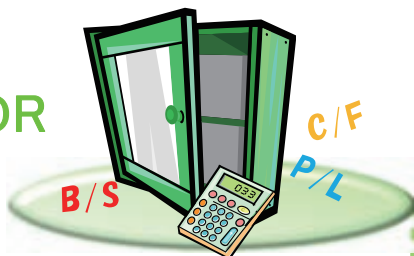
学部・研究科等別外国人留学生数

平成23年5月1日現在

区 分	学部				大学院								研究所等		小 計		合計		
	学生		研究生等		修士課程		専門職 学位課程		博士課程		外国人 研究生等		大学院 研究生		研究生				
	国費	私費	国費	私費	国費	私費	国費	私費	国費	私費	国費	私費	国費	私費	国費	私費		国費	私費
学部																			
教養学部(前期課程)	44	67															44	67	
法学部	7	4															7	4	
医学部		3																3	
工学部	31	27		15													31	42	
文学部	7	3		1													7	4	
理学部	6	5															6	5	
農学部	1	3		2													1	5	
経済学部	4	9															4	9	
教養学部	8	4		17													8	21	
教育学部																			
薬学部	3	5															3	5	
小 計	111	130		35													111	165	
大学院																			
人文社会系研究科					13	33			20	46	17	22		4			50	105	
教育学研究科					1	14			6	33	1	7					8	54	
法学政治学研究科					4	25		3	5	31	8	4					17	63	
経済学研究科					8	29			2	9	4	2					14	40	
総合文化研究科					19	49			36	95	20	27		4			75	175	
理学系研究科					4	16			25	16	4	4					33	36	
工学系研究科					122	226			220	297	41	71		2			383	596	
農学生命科学研究科					13	46			79	99	5	20		2			97	167	
医学系研究科					7	17	2	2	21	74	4	9		2			34	104	
薬学系研究科					2	4			8	10	2	11					12	25	
数理科学研究科					5	6			6	2		2					11	10	
新領域創成科学研究科					37	61			29	76	10	9					76	146	
情報理工学系研究科					30	46			44	48	15	14					89	108	
学際情報学府					10	30			22	29	8	23					40	82	
公共政策学教育部							5	22				1					5	23	
小 計					275	602	7	27	523	865	139	226		14			944	1734	
研究所等																			
医科学研究所																	1	1	
地震研究所																	1	1	
生産技術研究所																	6	6	
先端科学技術研究センター																	4	4	
小 計																	12	12	
合 計	111	130		35	275	602	7	27	523	865	139	226		14		12	1055	1911	

決算のDOOR

～数字が語る
東京大学



第10回 マイナス転じてプラスとなす

先日、22年度の財務諸表が公開されました。トップを飾る貸借対照表(B/S)は大学の資産状況を表します。中でも「土地」の総額はなんと8,906億円！さすが広大な演習林を各地にあわせ持つ東大ならではの金額ですが、実はこの8,906億円、必ずしも資産価値とイコールというわけではないのです。

というのも、会計の世界では金融商品を除くすべての資産は取得価額を用います。そのため、建物や備品は時の経過とともに一定額を減らす(減価償却)ことで正確な価値に近づけますが、市場価格に左右されやすい土地はそのまんま。たとえバブル期に15億円で買った土地が5億円に下落しても帳簿上では15億円のままで。これでは、資産状況を正しく伝えることができません。そこで、17年4月から土地など所有資産の使用価値や売却価値が帳簿金額から大きく下回った場合、資産価格を強制的に下げる臨時処理—「減損会計」が始まり、国立大学でも翌年度から導入されました。

減損処理の手順は次のとおりです。

- ① 対象資産のピックアップ
- ② 利用実績や市場価格の調査
(低下している場合は減損の兆候あり)
- ③ 将来の使用可能性と市場価格の回復の判断
(見込みがなければ減損を認識)
- ④ 帳簿金額が市場価値等より高い場合、差額を減損金額として計上し、資産額を一気に下げる(オシマイ)

例えるなら…結婚10年目、休日にはメタボ腹搔き搔きテレビ三昧の旦那さま。家事に育児に大忙しの奥さまの「手伝って！」の声も知らんぷり。「結婚当時はあんなに颯爽としてたのに、何よ今は！ゴロゴロ寝てるだけの役立たずなら、来月から小遣い半分ね！」奥さまの厳しい査定に似ている、かな？

さて、下の写真は三鷹市下連雀にあった井之頭学寮の跡地です。昭和24年から70年あまり使用された学生寮は、平成18年に老朽化のため取り壊され、跡地は更地に。具体的な利用計画が立たないうちに、帳簿金額が市場価格を上回り、平成20年に「減損処理」されました。

この「減損処理」、単に資産金額をマイナスするだけではありません。まず「兆候あり」と財務諸表に開示することで未使用資産の見直しというプラス効果もあるのです。この三鷹の土地も「兆候」段階で売却の検討もなされ、21年度に目出度く売却。その収益は学内のキャンパス整備に使われました。マイナスイメージの強い「減損処理」も実は、回りまわって先生や学生さんのお役に立っているのですね。(青)



(左から) 在りし日の井之頭寮、取り壊し風景、雑草生い茂る更地

本部財務部決算課 (内線22126)

E-mail: kessanka@ml.adm.u-tokyo.ac.jp

◆このコラムは一見複雑な国立大学法人会計をわかりやすくご紹介することを目的とし、文章の読みやすさを重視しているため、ある程度恣意的な表現を取る場合があります。あらかじめご了承ください。—ご意見、ご質問お待ちしております！

インタープリターズ・ バイブル

vol. 48



科学技術インタープリター養成プログラム

いわゆる「聖断」について

岡本 拓司

大学院総合文化研究科 准教授
教養学部附属教養教育高度化機構
科学技術インタープリター養成部門

原子爆弾とポツダム宣言受諾の関わりを調べていたところ、戦争の継続を主張する論理が意外に崩しにくいことに気づいた。1945年8月6日の原子爆弾投下後も、ソ連を介した和平工作は続けられ、8月9日のソ連参戦を受けて終戦に向けた諸会議が始められる。原子爆弾で状況が変わったとする主張に、広島に投下されたものが最初で最後の1発ではなかったかとの反論があったが、閣議の途中で長崎にも投下されたとの報がもたらされ、3発目以降があるとの了解が定着する。これで戦局に関する情報は出尽くしたが、陸相の阿南惟幾は継戦を主張した。理由は、連合国側が国体護持を保証しないからというものである。

阿南は、ソ連には勝てないと判断したが、米英相手の本土決戦には見込みはあると考えた。原子爆弾については、米兵の捕虜に暴行を加えて得た情報や、物理学者の仁科芳雄らから得た情報をもとに、米国は数百発を保有している可能性があるが対策はあると主張した(鈴木多聞『終戦』の政治史)。一方、武装解除と保障占領を条件とするポツダム宣言は国体護持を保証せず、受諾できないと判断した。軍事の専門家が主張するこの説は、論理的で崩しがたい。

終戦への道は、固い論理で粘る阿南を、国体は護持されるとなだめながら開かれていったが、その過程で、継戦にせよ終戦にせよ唯一の目的であった国体護持に代わる、或いは並ぶ目標が、議論の中に忍び込んでいった。国民の存続である。言い出したのは昭和天皇であり、初めは国体護持に次ぐ目的であったものが、終戦の詔書では宣言受諾の主目的となり、以後のラジオ放送などでも降伏の主な理由とされた。国体護持のみが目標であれば、それを明確には保証しないポツダム宣言の受諾は正当化しづらかったであろう。

昭和天皇は、原子爆弾登場後の本土決戦は民族の滅亡を意味すると考え、宣言受諾を決意した。明治憲法下の君主でありながら、陸軍大臣の判断は斥け、従来の議論には登場しなかった国民の存続を新たな目標に加えた。形式的に言えば異例づくめである。しかし、専門家の論理が入り込んだ袋小路で、生身の人間の感覚のみが新たな道を開きうることもある。そこにインタープリターの居る場所はないとも思わせる事例である。

★科学技術インタープリター養成プログラム

<http://science-interpreter.c.u-tokyo.ac.jp/>

大学の使命は教育と研究にあります。その中で、学内の研究者や部局と産業界との連携活動を支援、推進するという、いわば、産業界からの要請を受ける窓口ともいえる産学連携本部。私たちには、大学で生まれる「知」と、産業界・社会における「課題」を結びつけ、イノベーションに結びつけていく仕組みや組織が求められています。今回は、渡部副本部長にインタビューをお願いし、4月から着任された保立本部長に、「産学連携の展望」と題して、抱負をはじめ、本部における役割や活動についてお話しいただきました。 <取材:2011年4月28日>



副本部長

渡部 俊也 (わたなべ としや)
東京工業大学大学院理工学研究科無機材料工学専攻博士後期課程修了。先端科学技術研究センター教授、国際・産学共同研究センター長等を経て、先端科学技術研究センター教授。2010年12月より東京大学産学連携本部副本部長

本部長室発

産学連携の展望 <前編>

本部長

保立 和夫 (ほたて かずお)
東京大学大学院工学系研究科電子工学専攻博士課程修了。宇宙航空研究所専任講師、先端科学技術研究センター教授、大学院工学系研究科教授、大学院新領域創成科学研究科教授等を経て、現在、大学院工学系研究科電気系工学専攻教授。2008、2009年度工学系研究科長・工学部長。2011年4月より東京大学産学連携本部長



研究室から産学連携本部へ

渡部: 本部長になられて1カ月弱経ちましたが、まずご感想をお聞かせいただけますでしょうか。

保立: 工学系の一教員としてモノ作りに関わり、研究開発に携わってきましたので、今までは産学連携本部の皆さんにはお世話になってきた側になります。教員としてやりたいことや社会と関わりたいこと、企業の皆様との思いにも乖離があったりする場合にも出くわして、そういう悩みなどを産学連携本部の方々に聞いてもらったり、説いてもらったりしてきましたが、今後は立場がひっくり返りますね。産学連携の原点やあり方を改めて考えたり、様々な先生方にお伺いして、今日現在、考えているのは、大学で生まれる多くの新しい技術をできるだけ効率よく社会で使うためにはどうするのかということ、そのためにどうやって産学連携本部が働くのかということです。

せっかく大学で生まれたオリジナリティの高い新しい技術をどうやって社会で役立てていくかがポイントになるでしょう。

渡部: 研究者、産学連携本部の立場、企業の立場、政府や日本国としてのあり方など、様々な視点によって産学連携の風景も変わって見えると思います。本部長は今、どのような視点でどのような風景を見ておられるのか、今後どのような視点で見ようとされているのかについて伺えますでしょうか。

保立: 研究者や企業の皆様、あるいは国や世界とか、産学連携に関して、それぞれの立場で思考の重心は違うでしょうが、重心は異なっても様々な考え方が分布し、お互いにオーバーラップしているわけですから、そのオーバーラップ

る部分で、個々のケースに対して一番いい方法で連携が進むように、フレキシブルに行っていくべきでしょう。「このくらいの技術だったらこの企業と早く仲良くしたほうがいい」とか、「この技術だったらもっと汎用性があるから、大学としてももう少しキープして広く使われるように持っていったほうがいい」といったプロとしての産学連携の切り口が多々あると思います。個々の研究者には色々のご意見もあって、場合によっては産学連携本部は厳しいご批判も受けなければいけないのかもしれませんが、もう少し広い視点で、俯瞰しながら産学連携を進める方向にしなければいけないのではないのでしょうか。そういう意味でいいますと、研究室から見える見え方と、この産学連携本部の建物から見る見え方はやはり違うかなという気はしています。

国際産学連携を“意識”する

渡部: 海外との産学連携が非常に重要になってきています。最近では欧米だけではなく、中国などの新興国との連携も非常に重要になってきています。中国の大学では、日本の大学の4、5倍くらい特許取得がされ、さらにライセンスがここ2年ほどで急増していることもあり、日本企業も中国などの新興国の大学との連携を深めています。そういう中で、日本の大学も国際という視点で競争と連携を考えていく必要があると思います。本学の産学連携本部としても国際展開を図っているところですが、国際産学連携についてお考えを伺えますでしょうか。

保立: 大学の基本は教育と研究であり、特に研究面ではオリジナリティが重要であって、後追いの研究をしても大学の研究としては意味がないと思っています。いかに新しい発想が入っているのか、あるいはそれによって今までできなかったような機能がいかに出てくるのかという部分に力

点を置くべきです。産学連携にしても、オリジナリティを具現しつつも社会に根付かせるという二段階が必須ではないでしょうか。研究と教育を中核とする中で、国に閉じている必要は全くなく、グローバルに展開していくべきでしょう。研究は元々インターナショナルであることはすでに認識しているわけですが、教育面でもさらに国際的になっていくべきです。大学の根幹的ミッションである教育と研究のグローバル化、インターナショナル化の流れの中で、必然的に出てくるものとして展開していけばいいのではないのでしょうか。

別の言い方をすると、国際産学連携が独り歩きする必要はありません。産学連携も国際化が大事であって、国際産学連携を一生懸命進めようというのではなく、大学全体が本当の意味で国際化されていく流れの中で、必然的に国際的産学連携も起きてくるのではないかと思います。また別の言い方をすれば、学内で生まれたオリジナルな技術を世の中に根付かせ、社会で役

たせるために、その帰結として、例えば海外の企業と連携することが、その技術が社会で、世界で役立つための一番いい方法であるとすれば、当然、国際的な産学連携が生まれてくるのではないのでしょうか。ただ、自然体でいすぎると近場の企業との連携しか生まれてこないと思いますので、そういう意味でいえば、連携の相手を世界に求め、世界のニーズだけではなく、シーズも含めたあらゆる情報を集め、学内の技術とつなげていく活動は、国内との連携よりも意識して行うべきであり、そういう意味では、国際産学連携というキーワードを頭の中に入れておく必要があると思います。

渡部: 今まで行ってきた活動と多少異なる部分があるため、意識して国際産学連携を行うことで、本当の中核的なミッションを実現することにもつながるということですね。

<次号に続く>

このページでは、政策ビジョン研究センターが現在最も重要視しているトピックスを中心に、そのときどきのホットニュースをお届けします。

震災復興におけるネットワークの重要性 「つながり」再構築を

東日本大震災を受け、「つながり力」が問われている。個人のつながり、企業間のネットワークなど、つながりの重要性が再認識させられた。「ネットワーク」とも言われるつながりの束を通じて、幸福や信頼といった人の感情、情報や知識、部品や材料といった多様なものが伝わり、構成員同士が深く影響を及ぼし合う。今後の復興活動には、つながりの再構築という視点こそが求められている。



坂田一郎教授

ネットワークは要素とそれをつなぐ何らかの関係性で構成される。例えば、個人を要素とし友人関係を見ると友人ネットワーク、企業を要素、取引を関係性とする企業間ネットワーク、発電所を要素、送電線を関係性とする電力送電ネットワークとなる。

ネットワークという観点から見ると、人、企業、発電所などが、直接的な「つながり」だけでなく、2次、3次の間接的な「つながり」を通して、広く複雑に相互に影響を与えあう存在になっていることに気付

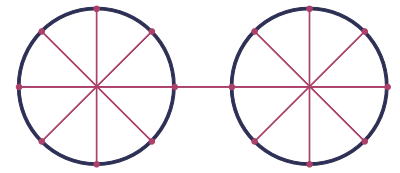
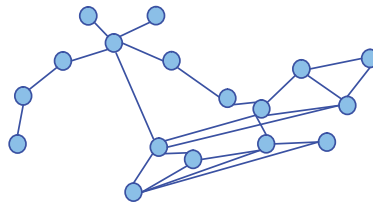
く。ネットワーク化は、個が分散している場合と比べて新たなものを生み出すといえる。公共的な施策や企業の経営戦略を考える際にも、そうした広範囲の影響を考慮することが重要だと考えられる。

東北地方は電気・電子部品、材料の世界の供給拠点となっていたが、震災で多くの工場が被災し、ネットワークが寸断された。その結果、直接又は2次取引先はもちろん、ネットワーク全体に影響が及んだが、その波紋の全体像は把握できていない。

被災中小支援急げ

被災した大企業の復旧は、かなりのスピードで進められている。今後、政策的に重点支援すべきは、「ネットワークの綻びを直す」という視点に立った、中小企業の復旧・復興支援である。支援対象を被災企業だけでなく、取引ネットワークを介してその影響が強く及ぶ範囲と捉え、仮に、被災地域の外であっても支援対象とすべきだ。その上で、「出荷先企業が多い」とか「代替がきかない」という重要な企業から先に復旧することが必要である。

長期的には中小企業を含めたネットワークのショックに対する耐久性を高めることが政策課題となってくる。図のグループA、B



A

B

はそれぞれ単体でみると、どこか一本が切れてもつながりは維持されるため耐久性があるように見えるが、全体としてはA、B間の連絡を一本のつながりに依存しているため、そこに脆弱性を抱えている。

今回の被害からみえた脆弱性の典型例は重要部品の一社生産である。複数の施設で生産をしたり、予め代替先を用意しておくといった対策が大事だ。ネットワークの全体像を日頃、きちんと把握しておくだけでも、弱点を知るといって大きな意味があるといえる。

ネットワーク構築支援関連コンテンツ

---「震災復興政策支援サイト」より抜粋---

- 「つながり」の視点で復興を
- 大震災からの復興におけるネットワークの重要性
- 震災とネットの役割 ウェブ情報、分析力高めよ
- 企業間つながり検索システム「SMEET」
- 東北関東大震災復興に向けての6つの視点

当センターでは、震災復興における「つながり」の重要性に注目し、ネットワーク構築支援に関する複数のコンテンツを、「震災復興政策支援サイト」にて発信しています。

先ごろ閣議決定された「中小企業白書 2011」において、本センターの協力により作成された被災地における中小企業の取引ネットワークのマップが掲載されました。

技術の社会影響評価と マネジメント

ネットワーク型のTA新体制を

福島第一原子力発電所の事故を受け、科学技術が社会に及ぼすさまざまな影響について評価あるいは再評価し、社会的対応策を検討することの重要性があらためて認識されています。

原子力技術については、安全規制の取り組みやエネルギー安全保障上の考慮も踏まえて再評価がグローバルに同時展開しています。宇宙開発についても社会ニーズとの関連での再評価が不可避です。他方、ナノテクノロジーや再生医療といった先進技術の進展が早くなる一方で、政策的対応や社会的イノベーションは追いつ

いていません。こうした現状を踏まえ、技術や社会のあり方について広く議論を喚起し、意思決定を支援する活動であるテクノロジーアセスメント(技術の社会影響評価:TA)を充実させていくことが必要です。

TAは、長期的・戦略的視点から先進技術の社会導入や普及に貢献し、既存の政策決定システムに対する補完的な役割を務めることが期待されます。こうした取り組みをより充実させる提案として、当センターでは昨年12月に政策提言「テクノロジーアセスメント制度化と選択肢」を発表しました。

TAの実践を担う主体は国の様々な機関以外に、研究所や大学、自治体、NPO等、複数考えられます。これらが相互に議論を喚起し、ネッ

トワーク化することによってもたらされる、ダイナミックで安定的なTA実施体制は、多様な観点からのTAが必要とされる、新しい世代のTAとして、注目されます。

ただし、こうしたネットワーク型のTAを社会において実効的にマネジメントしていくには、責任の所在を明確にするとともに、対象課題や社会的・政治的状況に合わせ他の主体との連携のあり方を柔軟に変えていくコア主体を置くことが不可欠です。



城山英明センター長・教授

※提言全文は当センターHPをご覧ください。

「ひとり5センチ」

アジアの隣人を知る12枚の写真
(中国編:その4)

中国の列車はいつでもどこでも非常に混んでいる。乗車時には多くの乗客が車内になだれ込み、到着すると乗客とともに押し出される(写真)。

以前、列車のなかで、私の前に座った中国人に「なんでこんなに混んでいるのか」と聞いたことがある。すると、そのおじさんは「ひとり5センチだから」と言った。最初、何を言っているのか理解できなかったが、詳しく聞いてみると、中国の線路の総距離を人口で割った値であった。

私自身(皆さんもそうであると思いますが)、線路の総距離を総人口で除したことがなかったので、当時、この「5センチ」を聞いたとき、なにか妙に説得力があるような不思議な感じがした。

後日、調べてみると中国の線路は68,000kmあり、人口は130,628万人であった(2005年当時)。計算してみると、まさに線路はひとり5.2センチであった。「私は飲食店の店長だ」というおじさんが、なぜこの値を知っていたのか疑問は深まるばかりである。

ちなみに日本は、計算してみると、ひとりあたり21.7センチである。日本で中国人から「なんで日本の電車は中国に比べ空いているのか」と問われたら「ひとり21センチだから」と答える機会をうかがっているが、いまだにそのチャンスは来ない。



大きな荷物をもった乗客

文・写真: 卯田宗平

日本・アジアに関する教育研究ネットワーク(ASNET機構)は、研究者や学生が分野を超えて繋がり、アジアに関係する教育や研究の新たな可能性を探るために設立された東京大学の機構です。

アジアのことを広く、深く知りたい学生の皆さんに研究科等横断型「日本・アジア学」教育プログラムも実施しています。詳しくは下記のURL:

<http://www.asnet.u-tokyo.ac.jp/>

ASNET機構

検索

ワタシのオシゴト / 第65回

Rings around the UT

柏地区共通事務センター 契約係

森山 博樹さん

なんくるないさ〜♪



良い子はマネしないように



世話焼きたGirlとBoys



ペロブリなManMan

前回のこの頁で医科学研究所の林さんから紹介されました、ネクタイをシュレッダーにかけた男、森山です。

現在、物性研究所、宇宙線研究所、空間・人工物研究センター、柏地区事務部の計4つの部局の契約を扱っています。数百円の契約から数億円の契約まで各研究室と業者との間に入り折衝を重ねるのが主な仕事です。

他にも各部局からの重要な機密文書の粉碎を行うことも業務の一つで、粉碎時、書類と一緒にネクタイも巻き込まれてしまい、危うく自分もシュレッダーにかけられそうになることもありました。

また、先日は経費削減推進の結果、自分で髪を切りすぎてしまい、両サイド・襟足の計3か所がハゲる、というクールビズなこともありましたが、沖縄育ちなので「なんくるないさ〜♪」で今日も励んでいます。
(/^▽^)/♪♪

得意ワザ: 人の笑顔づくり

自分の性格: シャイな江頭

次回執筆者のご指名: 西山祐司さん

次回執筆者との関係: 旧原子核研究所のときの友人

次回執筆者の紹介: 教えて西山さん、

試作工場ってどんなところ?

コミュニケーションセンターだより No.78

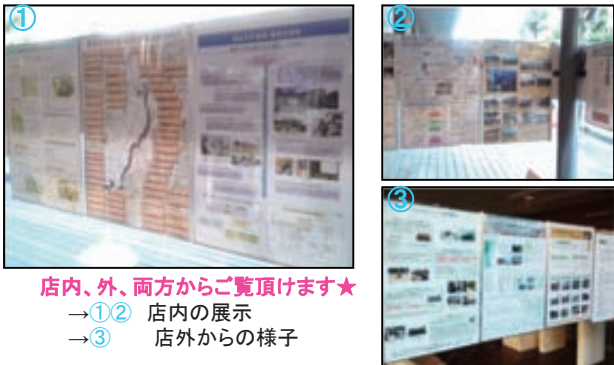
■展示スペースが変わりました!!

東日本大震災における
「東京大学の救援・復興支援活動」パネル展示

こんにちは!暑い日が続きますが、いかがお過ごしでしょうか?
コミュニケーションセンターでは、エントランス展示スペースが
変更されました。

大変人気のあったレゴ部の安田講堂に変わり、東日本大震災
における、「東京大学の救援・復興支援活動」のパネル展示を
行っております。震災の起こった2011年3月11日からの東京大
学救援・復興支援室の動き、支援活動MAP、学生によるボラ
ティア活動の報告など、内容は様々です。

展示スペースには椅子もご用意しておりますので、お近くにお
越しの際はぜひお立ち寄りください!!



店内、外、両方からご覧頂けます★

- ①② 店内の展示
- ③ 店外からの様子

■スタッフお薦め商品★



文科II類 2年
富永 航平

体力式アミノ酸
¥2,205(税込み)

こんにちは!
UTCCスタッフの富永です。
今回僕がお薦めする商品は
「体力式アミノ酸」です。
毎日の生活に欠かせないア
ミノ酸を手軽に摂取できるサプ
リメントで、当店1番人気の商品
です!

僕は当大学の水泳部に所属
し、週6回ハードな練習をしてい
ます。疲労回復に役立つ「体力
式アミノ酸」は欠かせないもの
となっています。

免疫力向上にも役立つので、
これからの季節、夏バテ、夏カ
ゼ予防にぜひご活用下さい!!
みなさんのご来店を、スタッフ
一同お待ちしております!

担当：UTCC三浦



東京大学コミュニケーションセンター
The University of Tokyo
Communication Center

OPEN：月曜～土曜 10：00～18：00
電話：03-5841-1039
<http://www.utcc.pr.u-tokyo.ac.jp>

～救援・復興支援室より～

■救援・復興支援室の活動(6月～7月)

- 6月22日・・・登録プロジェクト(66件)更新
- 6月27日・・・第2回救援・復興支援室会議開催
- 6月27日・・・東日本大震災に係る「ボランティア隊」参加
募集開始(第1班～第5班)
- 6月28日・・・「学生及び教職員のための第2回ボラン
ティア活動報告会」開催 →詳細はP17参照
- 7月15日・・・「救済・復興支援に係る登録プロジェクト活
動報告会」開催
- 7月25日・・・「東京大学救援・復興支援室遠野センター」
(通称「遠野東大センター」)開所

プロジェクト登録件数

66件

2011年6月22日現在

■救援・復興支援室の活動の詳細はウェブサイトをご覧ください。

http://www.u-tokyo.ac.jp/public/recovery/index_j.html

■救援・復興支援室

Email: kyuenfukkou@ml.adm.u-tokyo.ac.jp
内線: 21750

平成23年度
学内広報 発行スケジュール

号数	原稿〆切	発行日 (校了)	配布
1416	8月 30日(火)	9月 26日(月)	9月 30日(金)
1417	9月 29日(木)	10月25日(火)	10月31日(月)
1418	10月28日(金)	11月24日(木)	11月30日(水)
1419	学生生活実態調査号		
1420	11月24日(木)	12月16日(金)	12月22日(木)
1421	1月 5日(木)	1月 25日(水)	1月 31日(火)
1422	1月 31日(火)	2月 23日(木)	2月 29日(水)
1423	2月 29日(水)	3月 26日(月)	3月 30日(金)

都合により変更になる可能性がありますので最新のスケジュールは
下記URLよりご確認ください。

学内広報にご寄稿の際は、以下のURLにある
「記事提出要領」をご参照ください。

http://www.u-tokyo.ac.jp/gen03/kouhou_j.html
【東京大学ホームページ】→【左下の学内広報アイコンをクリック】

問い合わせ先・原稿提出先

本部広報課 広報企画チーム
TEL: 03-3811-3393 内線 82032
E-mail: kouhou@ml.adm.u-tokyo.ac.jp





病院前の桜並木



はじける青春--御殿下の若者



桜の木の下でランチ



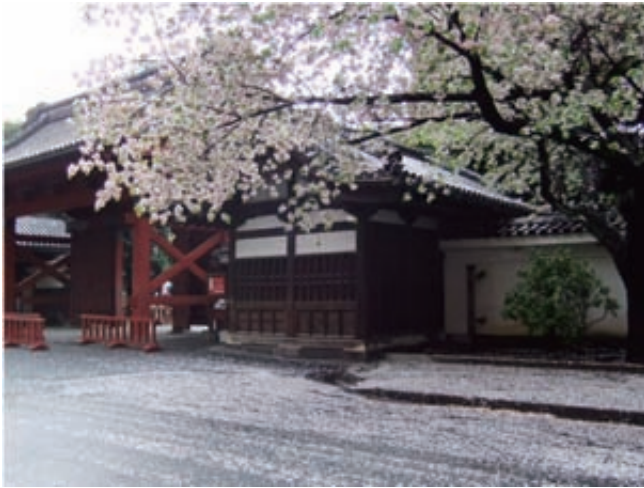
薬学部前の白蓮



水ぬるむ三四郎池

構内の春（2011年4月）

（撮影： 本部卒業生室 林 義之さん）



赤門桜 ～今年も咲いた～

赤門桜という名があるのかわかりませんが広報に投稿します。

(撮影： 文学部受付担当・田中善和さん)

— 特集テーマ&執筆部署募集告知 —

特集の記事を執筆してみませんか？

学内広報では巻頭特集の記事テーマとその執筆部署を募集しています。学内への周知を図るためのツールとして特集はとても効果的です。皆さんの部署でも、ぜひ特集の記事を執筆してみませんか？

1. 制作方法

① テーマの選定

全学の教職員を読者対象とするテーマを選定することになっています。まずは、本部広報グループに気軽に相談ください。特集に馴染まないテーマでない限り、対応します。

(締切日の1カ月前位までに一度ご相談ください)

② 内容・構成の決定

テーマが決まったら執筆部署と学内広報編集スタッフ(以下、編集スタッフ)が打ち合わせをしてページの内容を決めていきます。見開き2ページをひとつの単位とします。内容が盛りだくさんの場合は4ページ、または6ページで構成することもあります。

③ 原稿の執筆

決定した構成に合わせて執筆部署に原稿を書いていただきます。字数等は編集スタッフが提示します。原稿はWordファイルでご制作下さい。

④ ビジュアル要素の提供

特集に盛り込む写真・図・イラストを執筆部署から提供していただきます。手持ちの写真がない場合は編集スタッフが撮影にうかがいます。

(学外または他部署のホームページ等から写真・図・イラスト等を転用する場合は著作権に十分留意し、必ず先方の許諾を得てからご使用ください)

⑤ デザイン

お書きいただいた原稿、ご提供いただいた写真・図等を素材にして、編集スタッフがページデザインを作ります。もちろん、執筆部署でデザインを作っていたとしてもかまいません。

⑥ 校正

デザインしたページイメージをお送りしますので、主に文字校正を行なっていただきます。

⑦ 完成

刷り上がった学内広報は、執筆部署に多めに配布します。

2. 締切日

あらかじめ、こちらから期日を申しますので、ご協力をお願いします。通常の学内広報の切日の数日前を原稿締切日とします。

3. 問い合わせ先・原稿提出先

本部広報課 広報企画チーム

TEL：03-3811-3393 内線22031

E-mail：kouhou@ml.adm.u-tokyo.ac.jp

INFORMATION

募集

募集

本部学生支援課

平成23年度第1回(秋)
東京大学学生表彰「東京大学総長賞」の推薦募集開始

本学の学生を対象として、学業、課外活動、各種社会活動、大学間の国際交流等の各分野において、「優れた評価を受けた」「優秀な成績を収めた」「本学の名誉を高めた」などの顕著な功績のあった個人又は団体に、総長が表彰を行う「東京大学総長賞」は、平成14年度から実施されています。

本表彰は、本学教職員・学生からの推薦に基づき、「東京大学学生表彰選考会議」が選考にあたり、総長が表彰を行うものです。

第1回(秋)は、学業以外の課外活動等を対象に募集します。

なお、第2回(春)には年間総長賞受賞者の内、特に優秀な者に対し、「総長大賞」が授与される予定です。

記

1. 申請書類：学生表彰候補者推薦書に必要事項を記入し、参考資料等を添付してください。また、書類の提出にあたってはホームページ上の「推薦書類の提出について」を参照してください。
2. 推薦基準：以下のとおり。
3. 提出期限：**8月31日(水) 17時(必着)**
4. 選考結果：9月下旬に受賞者及び推薦者へご連絡するとともに本学HPで公表予定。
5. 授与式：10月25日(火)に開催予定。詳細は決まり次第お知らせします。

◎詳細については、ホームページをご覧ください。

http://www.u-tokyo.ac.jp/stu01/h12_j.html



【提出先及びお問合せ先】

教育・学生支援部学生支援課学生生活チーム

担当：辻角・山形(内線：22513・22514)

E-mail：gakuseiseikatsu@ml.adm.u-tokyo.ac.jp

平成18年6月28日

一部改正 平成22年6月23日

学生表彰選考会議

東京大学学生表彰「東京大学総長賞」推薦基準

東京大学学生表彰実施要綱(平成14年3月19日総長裁定、平成22年4月1日改正)第3に基づき、推薦の基準を以下のとおりとする。

【推薦基準】

1. 第1回(秋)
 - a) 課外活動において、国内外の各種スポーツ、競技、演奏、展示、発表等で優秀な成績を収め、本学の名誉を高めた個人もしくは団体、または課外活動を支援し、課外活動の充実と振興に著しい貢献をした個人もしくは団体
 - b) 環境保全、災害救援、社会福祉、青少年育成、海外援助協力等の各種社会活動において、活動実績が認められ、他の学生の範となった個人もしくは団体、または社会的に優れた評価を受け、本学の名誉を高めた個人もしくは団体
 - c) 大学間の国際交流において、相互理解と友好関係を深め、本学の国際交流の発展に著しい貢献をした個人もしくは団体
 - d) その他、これらに準ずるもので、「東京大学総長賞」に相応しい貢献があった個人もしくは団体
2. 第2回(春)

学業において、研鑽に励み、他の学生の範となった個人もしくは団体、または学界等により優れた評価を受け、本学の名誉を高めた個人若しくは団体

【被推薦資格】

- a) 個人の推薦においては、特段の場合、連名も可とする。
- b) 在学中の活動実績や学業等が上記推薦基準に該当する者は、卒業または修了後1年以内に限り被推薦者となることができる。

【推薦者】

1. 推薦基準1については、自薦又は他薦とする。
2. 推薦基準2については、学部学生は学部長、大学院学生は研究科長・教育部の部長に限る。

募集

大学院人文社会系研究科・文学部

平成24（2012）年度 大学院人文社会系研究科入学試験日程を発表

7月23日（土）から「平成24（2012）年度大学院人文社会系研究科修士課程及び博士課程学生募集要項」の配布を開始しました。日程は以下のとおりです。

【修士課程】

- 第一次試験（筆記試験） 平成24年1月21日（土）
- 第二次試験（口述試験等） 平成24年2月7日（火）
- ※ 現代文芸論専門分野、文化資源学研究専攻及び韓国朝鮮文化研究専攻の第二次試験は、2月6日（月）に行います。
- ※ 文化資源学研究専攻については、社会人特別選抜での受入れ（日本人及び日本国の永住許可を得ている者に限る）も行っています。

【博士課程】

- 第一次選考 論文審査等
（専門分野によっては、平成24年1月21日（土）に学力試験を実施）
- 第二次選考 口述試験等 平成24年2月9日（木）
- ※ 現代文芸論専門分野、文化資源学研究専攻及び韓国朝鮮文化研究専攻の第二次選考は、2月8日（水）に行います。
- ※ 文化資源学研究専攻については、社会人特別選抜での受入れ（日本人及び日本国の永住許可を得ている者に限る）も行っています。

また、出願期間は以下のとおりです。

【修士課程】

平成23年10月17日（月）～10月21日（金）
（郵送のみ受付。21日（金）必着）

【博士課程】

平成23年12月1日（木）～12月7日（水）
（直接持参又は郵送。7日（水）15：00必着）

募集要項の郵送を希望する場合は、封筒の表に「〇〇課程学生募集要項請求」と朱書きし、郵便番号・住所・氏名を明記して、200円分（修・博等2部必要な場合は240円分）の切手を貼付した返信用封筒（角型2号）を同封し、以下へ送付してください。

〒113-0033
東京都文京区本郷7丁目3番1号
東京大学大学院人文社会系研究科 事務部

電話 03-5841-3710、3712（大学院係）

お知らせ

お知らせ

大学院総合文化研究科・教養学部

「教養学部報」第540（7月6日）号の発行
——教員による、学生のための学内新聞——

「教養学部報」は、教養学部の正門傍、掲示板前、学際交流棟ロビー、15号館ロビー、図書館ロビー、生協書籍部、駒場保健センターで無料配布しています。バックナンバーもあります。

第540号の内容は以下のとおりとなっていますので、ぜひご覧ください。

前田京剛：超伝導100年

平岡秀一：分子の世界の組木工法～噛み合いの科学を目指して～

伊藤元己：「小石川植物園と植物学の世界」展

渡邊雄一郎：「記憶と記録」東京大学×南京大学同時開催～集中講義に参画して

清水剛：「臨時雇用者」は日本に何人いるのか？
～統計数値との付き合い方～

小林俊行（聞き手：寺田至）：インタビュー

井上學術賞受賞・無限次元の対称性の数学～根源から湧き出す泉の豊かさ～

増田建：駒場アラート奮闘記

増田一夫：〈本の棚〉菅原克也著

『英語と日本語のあいだ』

お知らせ

情報基盤センター

「秘書さんのためのはじめての論文の探し方」ほか 「情報探索ガイダンス」各種コース実施のお知らせ

講習会に参加して、文献の探し方・Webでの文献管理方法を、マスターしましょう！

情報基盤センター図書館電子化部門では、定期的に、「情報探索ガイダンス」各種コースを実施しています。

8月は、研究補助担当教職員を主対象とする「秘書さんのためのはじめての論文の探し方」や、白金キャンパスでの初開催となる「文献検索早わかり in 医科研」、東京大学OPACの新機能である文献管理ツールへのデータ出力を教える新コース「東大OPAC + RefWorks入門」も実施します。

本学にご所属であれば、学生・教職員を問わず、どなたでも参加できます。ぜひご参加ください。

※自宅からの利用方法はどのコースでも説明します。



■ 8/2 (火) 14:50~16:20

【秘書さんのためのはじめての論文の探し方 in 柏】

※予約優先

研究補助を担当されている教職員（短時間勤務有期雇用職員含む）を主対象として、文献リストの読み取り方、電子ジャーナルで論文を入手する方法、代表的な文献データベース（日本語・英語）の使い方、文献管理ツール（RefWorks）で文献リストを自動作成する方法を、実際にパソコンを操作しながら実習します。

インターネット初心者の方も歓迎です。先生に頼まれた論文の検索で困っていませんか？この機会に、論文の探し方の基本をマスターしましょう！

※「秘書さん」以外の方ももちろん歓迎です。

（共催：柏図書館）

■ 8/5 (金) 15:00~16:30

■ 8/9 (火) 10:30~12:00

■ 8/26 (金) 15:00~16:30（同内容3回）

【秘書さんのためのはじめての論文の探し方 in 本郷】

※予約優先

柏会場と同じ講習内容で、本郷キャンパスで3回実施します。ご都合の良い日時にご参加ください。

※「秘書さん」以外の方ももちろん歓迎です。



■ 8/4 (木) 15:15~16:30

【文献検索早わかり in 医科研】※予約優先

ご要望にお応えして、白金キャンパスでの初めての出張講習を実施することになりました！ぜひこの機会にご参加ください。

大学院生・研究者・研究補助者・病院職員など白金キャンパスの方向けに、学内での論文入手方法と、医学系の代表的な文献データベース（医中誌Web、PubMed、Web of Science）を使ってテーマから雑誌論文（日本語・英語）を探す基本的な方法を易しく解説します。

※講義形式です。検索実習はありません。

（共催：医科学研究所図書室）

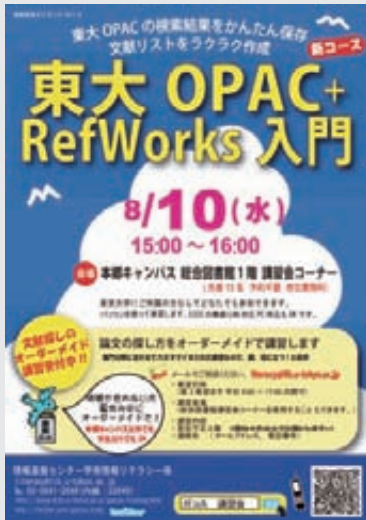
■ 8/10 (水) 15:00~16:00<新コース！>

【東大OPAC + RefWorks入門】※予約不要

今年リニューアルした新・東京大学OPACでは、検索結果のデータ（書名・著者名・出版年など）を文献管理ツール（RefWorksまたはEndNote Web）にダイレクトに保存できるようになりました。

保存したデータは、レポート・論文を書く際の文献リストの自動作成に活用できます。とても便利なこの新機能を、ぜひ知って活用してください。

新OPACの検索方法や、OPAC以外のデータベースからのRefWorksへのデータ取り込みも実習します。



●会場：(コースによって異なる)

- ・8/2 : 柏キャンパス 柏図書館1階
ラーニングサポートサービス 定員22名
希望者先着12名まで備付PC利用可
持込PC利用可 (無線LAN利用可能なもの)
- ・8/4 : 白金キャンパス 医科学研究所
1号館2階セミナー室 定員30名
- ・その他：本郷キャンパス 総合図書館 1階
講習会コーナー (ECCS無線LANまたは
全学共通無線LANサービス utroam設定
済みのノートPC持込OK) 定員15名

●参加費：無料

●申込み先：

学術情報リテラシー係 (literacy * lib.u-tokyo.ac.jp) 宛に、以下のメールをお送りください。

(*は@に置き換えて送信してください。)

件名： 8月ガイダンス参加希望 (参加日・コース名)

本文：

- (1)参加日・コース名
- (2)氏名 (3)身分 (4)所属 (5)講師への質問 (6)利用経
験

※8/10【東大OPAC + RefWorks入門】は予約不要。

★授業・ゼミ・学生グループなど対象にオーダーメイドで講習します！

論文の探し方の出張講習・オーダーメイド講習を随時受付中です(無料)。授業やゼミの内容に合わせて講習いたします。会場のことなど、ご相談に応じます。まずはお気軽にお問い合わせください。どのキャンパスでも、学生だけのグループでもOKです。

過去の実施例は以下のURLでご覧いただけます。

(<http://www.dl.itc.u-tokyo.ac.jp/gacos/shuccho.htm>)

ml)

★Litetopiメールマガジン発信中！

本学所属の方を対象に、データベースのニュースや講習会のご案内などをお届けします。配信ご希望の方は、下記アドレスまでメールでご連絡ください。(無料)



literacy@lib.u-tokyo.ac.jp

●お問い合わせ：

学術情報リテラシー係 03-5841-2649 (内線：22649)

literacy * lib.u-tokyo.ac.jp

(*は@に置き換えて送信してください。)

<http://www.dl.itc.u-tokyo.ac.jp/gacos/training.html>

(ツイッター http://twitter.com/gacos_today)



お知らせ

大学院理学系研究科・理学部

第72回小石川植物園市民セミナーのご案内

小石川植物園後援会の主催により、第72回小石川植物園市民セミナーを下記のとおり開催します。今回は、国際生物学オリンピック (IBO) の問題の紹介と解説です。2009年のIBOはつくばで開催されましたが、このときに出された問題の中から、植物関連のものを選んで紹介し、解答に挑戦していただいた後、解説をいたします。IBOの実際の様子についてもお話する予定です。本学関係者に限らず、どなたでも参加できます。どうぞ皆様お誘い合わせの上、是非ご参加下さいますよう、ご案内申し上げます。

講師：杉山 宗隆 (東京大学大学院理学系研究科准教授)

演題：「生物学オリンピックの問題を解いてみよう」

日時：8月21日 (日) 14:00~16:00

場所：理学系研究科附属植物園小石川本園

(小石川植物園) 柴田記念館

参加費：無料 (但し、一般の方は入園料が必要です)

参加申込方法：8月16日 (火) までに、往復葉書または電子メールにて後援会までお申し込み下さい。返信葉書ないし返信メールが招待状となります。なお参加ご希望多数の際は、お申し込み順に従い受付が締め切られるこ

とがあります。悪しからずご了承下さい。

主催・参加申込先：〒112-0001 文京区白山3-7-1
東京大学大学院理学系研究科附属植物園内
小石川植物園後援会
koishikawa-koenkai@koishikawa.gr.jp
問い合わせ先：理学系研究科附属植物園
杉山宗隆准教授（03-3814-0368）

お知らせ

本部広報課

広報センター夏季臨時休館のお知らせ

本学広報センター（龍岡門横）は、下記のとおり臨時休館させていただきます。

8月12日（金）～18日（木）

本学広報センターに関する情報は、以下のURLをご参照ください。

http://www.u-tokyo.ac.jp/gen03/public02_j.html

【東京大学ホームページ】→【右列の『広報・情報公開』をクリック】→【『広報センター』をクリック】

なお、閲覧可能な刊行物や配布物がありましたら、随時ご提供いただきたくお願い申し上げます。

読者投稿写真

コーヒーの花



コメント：2月27日に東洋文化研究所7階の私の研究室でコーヒーの花が咲きました。

（撮影：東洋文化研究所 池本幸生さん）

三四郎池の白鷺君（この池の下宿人でいつもいる）



つかまえた！！



（撮影：本部卒業生室 林 義之さん）

各地区保健センター夏季の診療日程について

7月25日（月）～8月26日（金）の期間は、下表のとおり業務を行います。なお、夏季休業日は、全業務休止となります。

※診療日程はやむを得ず変更となる場合がありますので、ご利用の際には各地区保健センターWebサイトや掲示等で確認されるようお願いします。

■本郷地区（03-5841-2575） 夏季休業日 8/12（金）、15（月）

診療科等	診療日時等	対象者
内科	受付時間：月～金 10：00～12：20 9：00～10：00, 12：20～17：00は急患対応いたします。（7/27を除きます） 7/27（水）のみ緊急対応は15：00までになります。	学生・ 教職員
精神科 （予約制）	月～金 9：50～12：50 13：50～16：00 【変更される場合がありますので保健センターサイトにてご確認ください】	
歯科 （予約制）	7/25（月）・8/1（月）・8（月）・10（水）・22（月）13：30～15：30	
	7/27（水）・8/3（水）・17（水）・24（水）13：30～16：00	
	7/28（木）・8/4（木）・18（木）・25（木）13：30～16：00 7/29（金）・8/19（金）・26（金）10：00～11：30	
耳鼻咽喉科	7/25（月）・26（火）・28（木）・29（金） 8/1（月）・2（火）・5（金）・22（月） 10：00～12：20 【変更される場合がありますので保健センターサイトにてご確認ください。】	
	学生健診追加項目検査	日程は、健康管理室（内22580）またはWebサイトで確認してください。

■駒場地区（03-5454-6831） 夏季休業日 8/12（金）、15（月）

診療科	診療日時等	対象者
内科	月～金 10：00～12：20 【※7/27を除く7/29までは午後も診療します。】 9：00～10：00, 12：20～17：00は急患対応いたします。 7/27（水）のみ急患対応は13：00までになります。	学生・ 教職員
精神科 （予約制）	月～金 9：50～12：50 13：50～16：00 【変更される場合がありますので、保健センターサイトにてご確認ください】	
歯科 （予約制）	7/26（火）・8/9（火）10：00～12：40, 14：00～15：30	
	8/4（木）10：00～12：00 【矯正相談】、8/5（金）・19（金）14：00～16：00 8/23（火）10：00～12：40	
皮膚科	7/25（月） 9：30～11：15 8/22（月） 休診	
整形外科	8/26（金） 通常時間帯	

■柏地区（04-7136-3040） 夏季休業日 8/17（水）～19（金）

診療科	診療日時等	対象者
内科	受付時間：月～金 10：00～12：20 9：00～10：00, 12：20～17：00は急患対応いたします。（7/27を除きます） ※ 7/27（水）のみ急患対応は13：30までになります。	学生・ 教職員
	精神科 （予約制）	

人事異動（教員）

発令日、部局、職、氏名（五十音）順

発令日	氏名	異動内容	旧（現）職等
（退 職）			
23.6.30	組頭 広志	辞 職(高工エネルギー加速器研究機構教授)	大学院工学系研究科准教授
23.6.30	中林 伸一	辞 職(大学院公共政策学連携研究部特任教授)	大学院公共政策学連携研究部教授
（採 用）			
23.7.1	辻 佳子	環境安全研究センター准教授	大学院工学系研究科特任助教
23.7.1	藤堂 具紀	医科学研究所附属先端医療研究センター教授	大学院医学系研究科特任教授
23.7.1	川村 静児	宇宙線研究所教授	自然科学研究機構国立天文台光赤外研究部准教授
（昇 任）			
23.6.16	寺谷 広司	大学院法学政治学研究科教授	大学院法学政治学研究科准教授
23.6.16	柴田 直哉	大学院工学系研究科附属総合研究機構准教授	大学院工学系研究科附属総合研究機構助教
23.6.16	奥村 公宏	宇宙線研究所附属宇宙ニュートリノ観測情報融合センター准教授	宇宙線研究所附属宇宙ニュートリノ観測情報融合センター助教
23.7.1	関谷 勇司	情報基盤センター准教授	情報基盤センター講師
23.7.1	杉本 史子	史料編纂所教授	史料編纂所准教授
（配置換）			
23.6.16	伊庭 齐志	大学院情報理工学系研究科教授	大学院工学系研究科教授
23.7.1	杉本 雅則	情報基盤センター准教授	大学院工学系研究科准教授
23.7.1	小島 茂明	大学院新領域創成科学研究科教授	大気海洋研究所教授
23.7.1	五十嵐 健夫	大学院情報学環教授	大学院情報理工学系研究科教授
（出向復帰）			
23.7.1	太田 與洋	産学連携本部教授	新エネルギー・産業技術総合開発機構プログラムマネージャー

※退職後又は採用前の職等については、国の機関及び従前国の機関であった法人等のみ掲載した。

東京大学における教員の任期に関する規則に基づく専攻、講座、研究部門等の発令については、記載を省略した。



2011年12月竣工 2012年4月開業予定
 東京大学伊藤国際学術研究センターを御存じですか？



■伊藤謝恩ホール及びイベントスペース (左:伊藤謝恩ホール、右上・右下:イベントスペース利用イメージ)

- **プレミアム国際会議仕様**
 100～500名対応 最新音響・画像・通信設備 アリーナに多機能可動機86台 同時通訳室
- **多目的イベントスペースを併設**
 ポスター展示やレセプションに利用できる学術施設仕様の希少な設計デザイン
- **コンファレンス・サポート・サービス**
 民間業者と連携して、会議事前準備 ケイタリング 当日運営支援などのお手伝いをします

■名前の由来と期待される役割

伊藤国際学術研究センターは、伊藤雅俊氏(セブン&アイ・ホールディングス名誉会長)並びに伊藤伸子氏(同夫人)による寄附に基づき、社会と大学との関わりを深めるための社会連携拠点として赤門横の学士会分館跡地に建設中です。

本学は近年、社会との連携を深めながら、現代の重要課題に対する政策提言や次代を牽引する社会人の育成等に積極的に取り組んでおります。また卒業生をはじめ東京大学を取り巻く人々との絆を強める場の提供を進めております。

本センターは、寄附者のご理解とご協力のもと、こうした社会連携活動を長期的な視座に立って発展させるために相応しい環境を用意するものです。

世界に通じる、グローバルな感覚を持った各界のリーダーを育成するために、また世界最先端の学術活動を支えるために、高度な研究教育空間や、国際的な会議や学会にふさわしい施設、さらには人材と情報の交流の場としてのレセプション施設やファカルティダイニング等を整備します。

■主要施設一覧

ゾーン	階	室名	面積 (m ²)	定員 (名)
ホール・イベント	B2	伊藤謝恩ホール	413	403-489
		イベントスペース	332	80-
飲食施設	B1	交流スペース、ギャラリー	—	—
		レストラン、カフェ	—	—
共用会議室	2	ラウンジ	—	—
		会議室A-C	47/23/15	12/8/6
共用会議室	3	EMP	—	—
		特別会議室	104	37
教育研究	3-5	教室A	122	45
		政策ビジョン研究センター	—	—



← **特別会議室**
 ・多機能チェア及びデスク
 ・天井高4m超 煉瓦壁の重厚な空間



← **会議室A**
 ・コンファレンスコール対応
 ・飲食用個室としても利用可能

■問合せ

伊藤国際学術研究センター準備室 (室長 鶴田靖人)
itocenter@ml.adm.u-tokyo.ac.jp 内線 20779

特集

- 02 マリオ・バルガス=リヨサ氏に名誉博士称号を授与

NEWS

- 10 春の紫綬褒章受章

一般ニュース

- 11 産学連携本部、高齢社会総合研究機構
東京大学ジェロントロジーコンソーシアム活動報告
開催
- 12 本部国際企画課
「第9回プレジデント・カウンシル」の開催
- 13 生命科学ネットワーク
第11回東京大学生命科学シンポジウム開催
- 14 本部キャリアサポート課
知の創造的摩擦プロジェクト第12回交流会開催
- 14 本部学生支援課
2011年度京都大学東京大学総合対校戦開会式開催さ
れる
- 15 本部管理課
老農・船津伝次平のゆかりの地へ
一追分ロジの国際交流—
- 16 海洋アライアンス
第12回イブニングセミナー開催の報告
- 17 本部奨学厚生課
東京大学光イノベーション基金奨学金
平成23年度受給者証書授与式を開催
- 17 本部人事給与課
名誉教授の称号授与
- 17 救援・復興支援室
「第2回ボランティア活動報告会」が開催される

部局ニュース

- 18 生産技術研究所
ITSセミナーシリーズ「ITSセミナー in 京都 ～観光
とITS～」を開催
- 19 大学院教育学研究科・教育学部
謎の樹、教育学研究科に現る
- 20 大学院法学政治学研究科・法学部
新入生歓迎会、外国人留学生等との懇談会を開催
- 20 大学院人文社会系研究科・文学部
濱田総長 北見市訪問、常呂実習施設視察
- 21 大学院経済学研究科・経済学部
留学生社会科学見学及び懇談会を開催
- 21 大学院工学系研究科・工学部
工学系研究科・工学部で第2回ご父母のためのオー
ンキャンパス開かれる
- 22 医科学研究所
第38回医科学研究所創立記念シンポジウム開催され
る
- 23 大学院農学生命科学研究科・農学部
「東日本大震災ボランティア報告会」が開催される
- 24 大学院法学政治学研究科・法学部
外国人留学生見学旅行を実施
- 24 大学院工学系研究科・工学部
ラリー・モンテカルロ・ヒストリック参戦プロジェク
ト、蒲田駅前で矢口消防署消防演習に協力参加
- 25 大学院理学系研究科・理学部
大学院生出張授業プロジェクトBAPが小柴昌俊科学
教育賞奨励賞を受賞
- 26 大学院工学系研究科・工学部
工学系等地震訓練が行われる
- 27 生産技術研究所
国際シンポジウム「International Symposium on ITS
Research 2011 in Taiwan」を開催
- 28 大学院新領域創成科学研究科
第3回新領域創成科学研究科「市民講座」開催

◆表紙写真◆

謝辞を述べるマリオ・バルガス=リヨサ氏
【2～9ページに特集】

キャンパスニュース

- 29 本部キャリアサポート課
平成22年度学部卒業生及び大学院修了者の就職状況
- 36 本部留学生・外国人研究者支援課
平成23年度外国人学生数一國費外国人留学生数1,055
人、私費外国人留学生数1,878人 外国政府派遣留
学生数33人、その他の外国人学生（在日外国人学生）
数288人一

コラム

- 40 決算のDOOR ～数字が語る東京大学 第10回
- 40 インタープリターズバイブル vol.48
- 41 Crossroad 産学連携本部だより vol.68
- 42 Policy + alt vol.22
- 43 ASIAN DIVERSITY No.9
- 43 Relay Column「ワタシのオシゴト」 第65回
- 44 コミュニケーションセンターだより No.78
- 44 救援・復興支援室より No.2

INFORMATION

募集

- 47 本部学生支援課
平成23年度第1回（秋）東京大学学生表彰「東京大
学総長賞」の推薦募集開始
- 48 大学院人文社会系研究科・文学部
平成24（2012）年度 大学院人文社会系研究科入学
試験日程を発表

お知らせ

- 48 大学院総合文化研究科・教養学部
「教養学部報」第540（7月6日）号の発行——教員
による、学生のための学内新聞——
- 49 情報基盤センター
「秘書さんのためのはじめての論文の探し方」ほか“情
報探索ガイド”各種コース実施のお知らせ
- 50 大学院理学系研究科・理学部
第72回小石川植物園市民セミナーのご案内
- 51 本部広報課
広報センター夏季臨時休館のお知らせ
- 52 保健・健康推進本部
各地区保健センター夏季の診療日程について

事務連絡

- 53 人事異動（教員）

巻末特別記事

- 54 東京大学伊藤国際学術研究センターをご存じですか？

淡青評論

- 56 緑は芽吹いているだろうか

編集後記

暑い日が続いていますが、みなさまいかがお過ごしでしょうか。
今年は節電の影響で個人の涼のとり方の工夫が特に問われてい
ると思います。広報課でも、太陽電池で動く首からかける扇風
機や、保冷剤が入るマフラーなど、おもしろ涼グッズが登場し
ました。ありがちですが、私の場合大量に麦茶をつくって携帯
したり、冷やし中華を食べたりして涼んでいます。一人暮らし
だとなかなか買えないのですが、すいかが恋しいです。そうめ
んや冷ややっこなど、昔の人のおいしく涼しく過ごす知恵はす
ごいとお感する今日この頃です。（ふ）



七徳堂鬼瓦

緑は芽吹いているだろうか

毎年春から夏にかけて本郷キャンパスを歩くと、木々が淡い緑から新緑、やがて深い緑へと変わる劇的な変化にしばしば目を奪われ、今年もまた季節が巡り行くことを心よりうれしく思う。都心の一等地で建物はやや過密だが、それでもこれだけの豊かな緑を美しく保っている大学を誇らしく思う。

今年はしかし、津波に流され破壊された地域の映像が脳裏から離れず、キャンパスの緑と強烈な対比をなして気持ちを沈ませる。被災地にも緑は芽吹いているだろうか。生き残った木々の緑が、避難所生活する人々の気持ちを多少なりとも和ませてくれているだろうか。テレビで見た初老の男性の言葉を思い出す。家族をすべて奪われながら、家の跡地に立って語っていた。ここにはチューリップの球根がたくさんあった。あれはいったいどうなっただろう。ちゃんと芽が出ると良いが。何もなくなったこの地域が、チューリップの花でいっぱいになったらさぞきれいだろうと。人間の強さと、言葉に表すことのできない哀しさを、同時に見た思いがした。

地震や津波の予測、原子力の安全性、放射性物質の拡散予測、医療、通信網、交通網の緊急時対応、電力・エネルギー問題、社会制度など、震災は数々の問題を我々に投げかけた。政局が混乱の極みにも思える今、国の意思決定に大きな影響力を持つ（持ち得る）組織として、直接的にも間接的にも東京大学が果たすべき役割は極めて大きい。部局、学科・専攻、研究者、学生団体など、様々なレベルで様々な動きが始まっている。立場や考え方の違いがあっても、必ずしも方向性は一致しないかもしれないが、大学として全体をつなぎ、学問的・歴史的テリトリーを超えた意見醸成、あるいは少なくとも課題解決に向けた連携の場を作ることはできないものだろうか。

どんなにひどい震災であっても、季節は巡り、緑は芽吹き、春にはチューリップが咲くに違いない。この自然の力に期待しながら、少なくとも人災だけは繰り返さないように、私たちは何かをしなければならないのだと思う。

常行 真司（大学院理学系研究科・理学部）

（淡青評論は、学内の教職員の方々をお願いして、個人の立場で自由に意見を述べていただく欄です。）

【訂正】

学内広報において、一部誤りがありましたので訂正いたします。関係部署および関係者の皆様に深くお詫び申し上げます。

No.1413 (2011.6.22)

19ページ：左段本文 上から5行目

(誤) 植田清美産学連携課長

(正) 植田清実産学連携課長

この「学内広報」の記事を転載・引用する場合には、事前に広報室の了承を得、掲載した刊行物若干部を広報室までお送りください。なお、記事についての問い合わせ及び意見の申し入れは、本部広報課を通じて行ってください。

No.1414 2011年7月25日

東京大学広報室

〒113-8654

東京都文京区本郷7丁目3番1号

東京大学本部広報課

TEL：03-3811-3393

e-mail：kouhou@ml.adm.u-tokyo.ac.jp

http://www.u-tokyo.ac.jp/